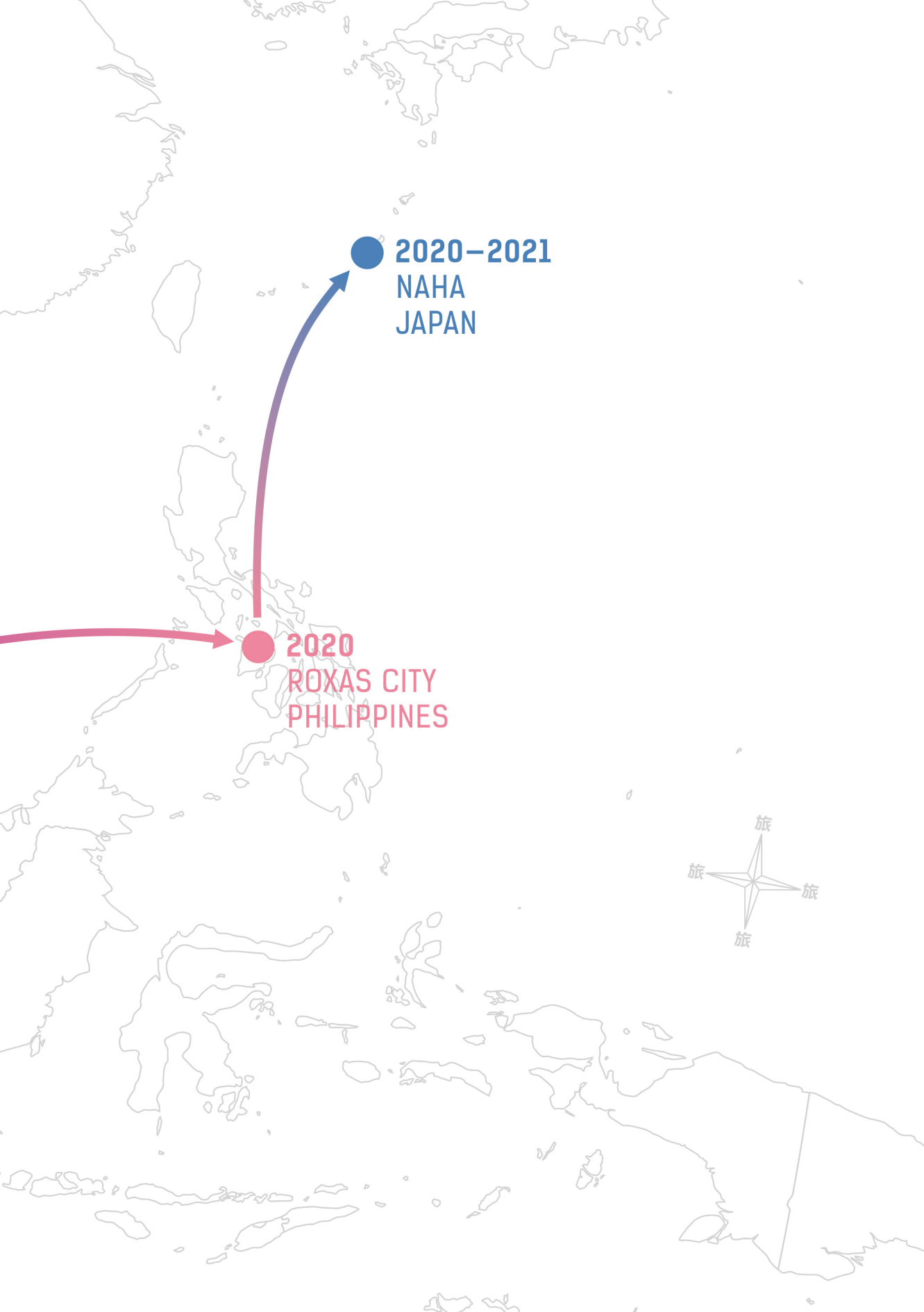
日本語版

FOOTPRINTS

Treading Through Cities,
Contexts and Practices

旅


2018
KUALA LUMPUR
MALAYSIA
2018
YOGYAKARTA
INDONESIA


2020–2021
NAHA
JAPAN
2020
ROXAS CITY
PHILIPPINES
旅
旅
旅
旅

Jejak旅 Exchange 2018–2021

Wandering Asian Contemporary Performance

10 ジョグジャカルタ（2018年）
「Jejak-旅 Tabi：二つの都市から」
ムハンマド・アベ

18 クアラルンプール（2018年）
「On *Jejak-旅 Tabi*」
マーク・テ

38 BRIDGING EDITION ロハスシティ、那覇（2020年）+ PANDEMIC
「9人の迷える沖縄人についての覚書」
アルフィアン・サアット

60 実施プログラム

CONTENT

6 AFTERWORD

28 ロハスシティ（2020年）
「彷徨える女王たちと踊る：Jejak-旅 Exchange をめぐる省察」
ノルベルト・ローランド
「西ビサヤの文学と歴史におけるフィリピン女性の進化」
マセシリア・ロクシン・ナヴァ博士

48 那覇・オンライン（2021年）
「石川真生の写真とフィリピン」
亀海 史明
「Jejak-旅 Exchange　に参加して」
当山彰一

66 キュレーター

69 奥付



AFTERWORD

始まりは、旅だった。

「Jejak-旅 Exchange: Wandering Asian Contemporary Performance」のきっかけとなったのは、2017年中頃に中村茜のおかげで実現したいくつかの会話だった。当時、彼女はアジアン・カルチュラル・カウンシル（ACC）のフェローシップの一環でバンコクに住んでいた。彼女はわたしとリム・ハウニェンを、自身がプロデュースした岡田利規のスーパープレミアムソフトWバニラリッチ」（2016）に招待してくれて、いたって気楽にバンコクを旅するなかで、ひとつの対話が織りなされ始めたのだった。

キュレーター、プロデューサー、あるいはドラマトゥルク（でもある実践家）にとって、当時は混迷を極めていた。2014年から立て続けに、アジア屈指の規模を誇るアートセンターがオープンするのを（あるいはオープン準備をしているのを）私たちは目の当たりにしてきた。光州（2014）、台中（2016）、そして当時はまだ未完成だった、高雄と台北のそれである。 バンコクの道を歩きながら、私たちは思案し、問い始めたのだ。

それぞれが－いずれも自分たちこそがアジアらしさを定義しようとしている－大都市から目を背け、より小さな都市に目を向けて、そこでアーティストたちがどのように創作をしているのかを知ることに注力することができないだろうか。こうした小都市を繋ぐものは何だろう？ （そもそも繋ぐものなんてあるのだろうか）これらの都市はどのような歴史の糸で結ばれ、どのような政治的／文化的／経済的な状況との交渉のなかで活動が行われているのだろうか？

Jejak-旅 Exchange はこうした議論から生まれた。名前を見てもわかるように、初めから旅の精神を重視していて（jejak というのはマレー語では「歩み」インドネシア語では「足跡」という意味だし「旅」という字は日本語でも中国語でも同じ意味をもつ）、目の前の道を歩くことで学んでいこうという意識が強かった。初めは毎年開催するつもりだったのだが、2018年に初めて実施したときに（この時はジョグジャカルタとクアラルンプールを繋ぐプログラムだった）より詳細な調査が必要だということが実感された。

我々の「旅」は、長い道程を経ることになった。旅の原動力は、アーティストや様々な芸術実践を行う人々に、アジアの様々な地域をよく知ってもらいたいという意志だった。そのためには、比較的小さな、親密な集まりを作る必要があった。そうすることで、招待された側もした側も、深く有意義で、率直な対話をできるようにしたかったのだ。イベントのある時もない時も、ただ都市を旅しながら対話をする、そんな風にしたかった。

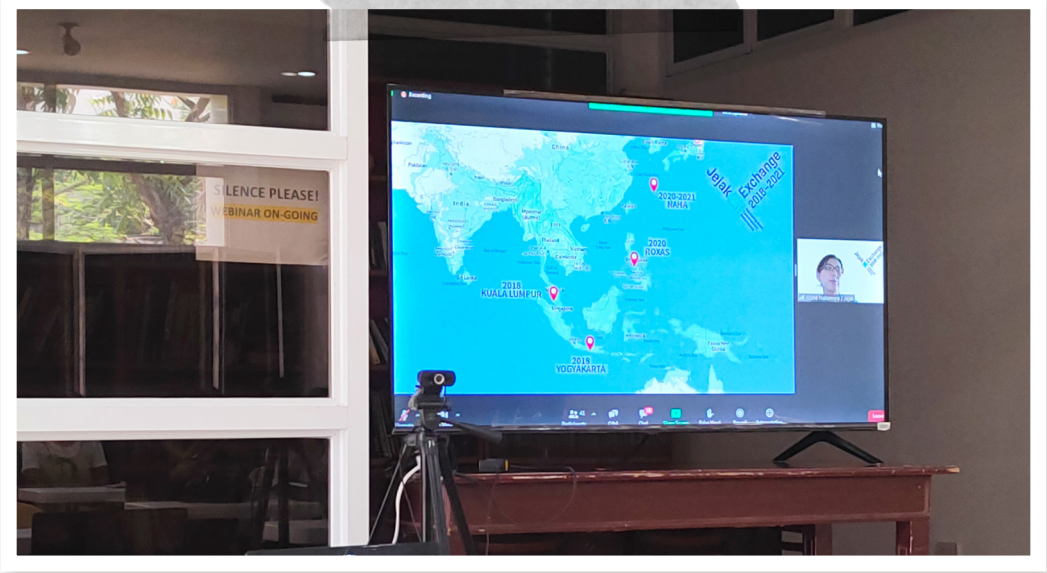


3年間を通して初めの3都市では予定通りプログラムを開催することができた（2018年にはジョグジャカルター以下ジョグジャーとクアラルンプール－以下KL－、2019年には那覇とフィリピンのバコロド、およびエスカランテを繋いだ）。ネグロス島のバコロドでのリサーチは、人権活動としての演劇を題材としたことで、開催を継続することが危険になったので、より安全な方策として、パナイ島のロハスシティに寄り道をすることにした。私たちはそれぞれの街で、その地域の実践家との共同キュレーションでプログラムを作り上げた。ジョグジャではセメティアートハウス、KLではASWARAとDPAC（ダマンサラ舞台芸術センター）、マニラからはグリーン・パパイヤ・コレクティブ、そして那覇からは野村政之である。

そこにパンデミックが到来した。当初2020年の8～9月に開催する予定だった那覇編は、 その頃にはライブ開催ができるのではという期待を込めて、2021年9月に延期された。それまでの橋がかりとして2020年の12月にオンラインプログラムを公開し、那覇のアートシーンを紹介しながら、世界全体でひとつのコミュニティとして芸術実践を続けていくために、いま必要なレジリエンスについて考察した。











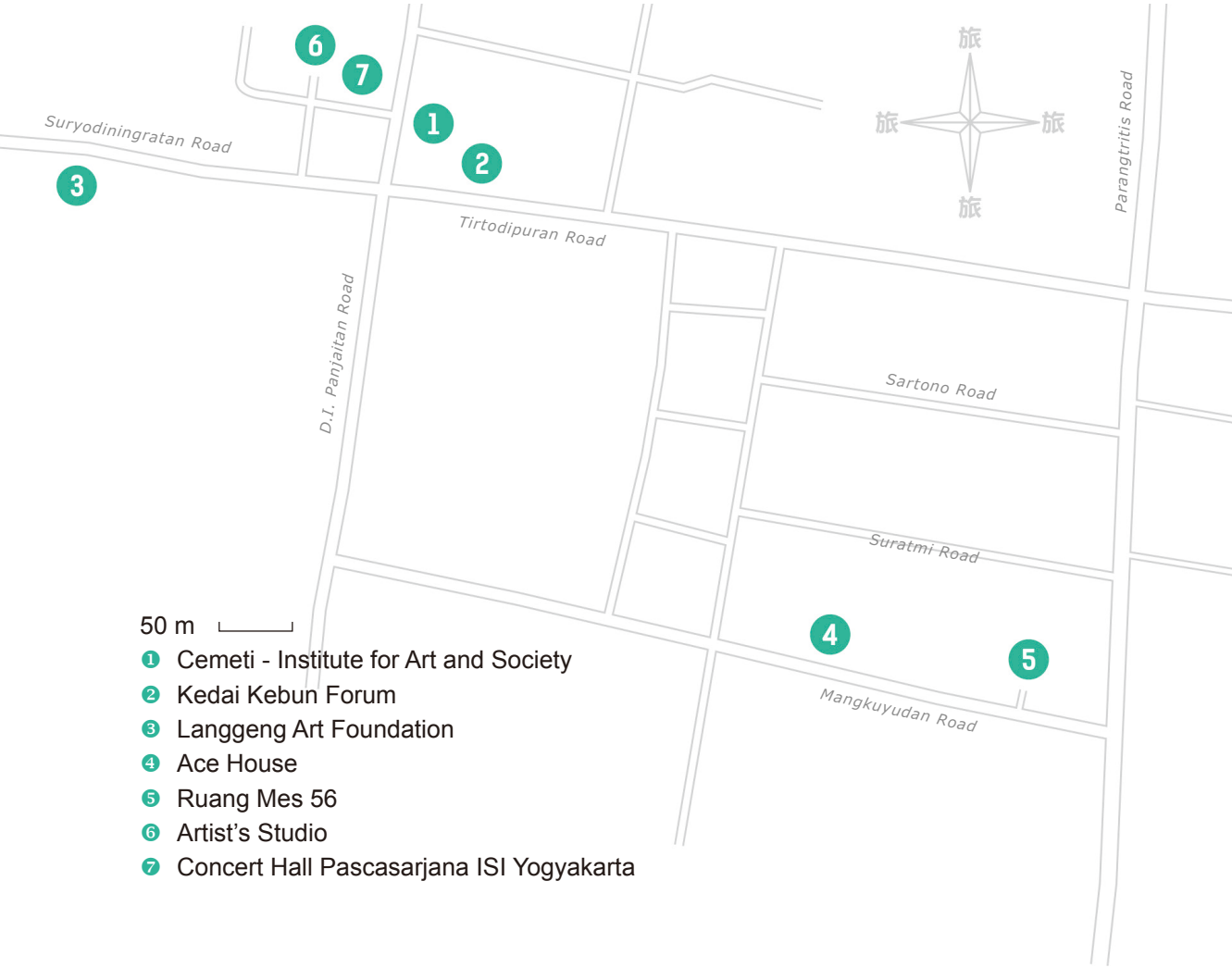
そして2021年となったが、残念ながら状況はほとんど変わらなかった。この状況への適応を迫られ、私たちは、いま一度のオンライン開催を選んだ。今回は那覇とロハスシティを繋ぐことにくわえ、ジョグジャとKLの実践にも触れた。プログラムを通して意味ある繋がりを作るため、各地の文脈に合わせたプログラムを考案した。また、きわめて平板なZoomの画面に「ライブ感」を出すための工夫も行った。那覇での組踊のワークショップはブラックボックスの劇場から、ロハスのディスカッションはミュージアムから、マニラ在住のアーティストであるヴィム・ナデラの短いパフォーマンスはグリーン・パパイヤの事務所から配信され、ジョグジャの演劇集団であるコムニタス・サカトヤも、自らの会場からオンラインセッションに参加した。

本冊子は、これまでこのプロジェクトに関わってきた人々による省察をまとめたものである。 7本のエッセイが収録されているほか－いずれも今回のために書き下ろされたものだ－もっと短くプログラムの雰囲気を伝えてくれる言葉も記されている. ここに収められた Jejak-旅 Exchange の道程が、同じような志を持つ人たちの手による新たな対話の材料となることを期待している。

2018 YOGYAKARTA INDONESIA

ジョグジャカルタ

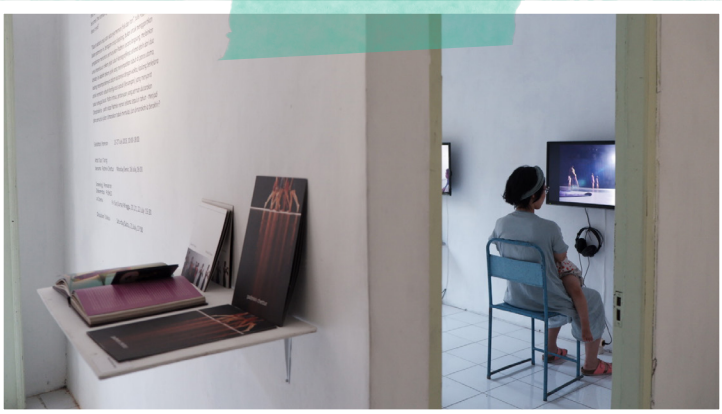




50 m

1. Cemeti - Institute for Art and Society
2. Kedai Kebun Forum
3. Langgeng Art Foundation
4. Ace House
5. Ruang Mes 56
6. Artist's Studio
7. Concert Hall Pascasarjana ISI Yogyakarta







JEJAK–旅 TABI: 二つの都市から

ムハンマド・アベ

私はJejak-旅 Exchange の4つの会期をいずれも経験した。最初はインドネシアのジョグジャカルタで、次がフィリピンのロハスシティ、その後は2020年12月にオンラインで行われた那覇編で、最後が直近に開催されたジョグジャカルタと沖縄をめぐるオンラインのイベントだ。初めて関わったのはリンダ・マヤサリと共に行ったプロジェクトを通してだった。1950～60年代にジョグジャカルタで活動し、現代的な舞台芸術のシーンの形成におおきく貢献した振付家であるバゴン・クスディアルジョとヴィシュヌ・ワルダナに関するアーカイブ展示を行った。二度目はロハスシティに招かれてPETA（フィリピン教育演劇協会）が1980～90年代にインドネシア演劇の展開にどのような影響を持ったかについての研究発表を行った。那覇編への橋がかりとなるオンラインイベントでは、レジリエンスについてのディスカッションに参加した。直近のところでは、ジョグジャカルタと日本それぞれの劇場のネットワークが参加するミーティングの準備に携わった。

それぞれの会期にまつわる思い出はたくさんある。いずれの都市で開催されたときもおもしろいパフォーマンスや示唆に富んだディスカッションを経験することができた。しかしこのエッセイでは特に面白いと感じ、未だ私に強い印象を残しているものについて話したいと思う。それらは概ね2つのカテゴリーに当てはまる。一つ目は現在と過去の緊張関係を扱うもの。2つ目は、美的／非美的なものの緊張関係を扱うものだ。この2つのサブテーマを設定することが私の散漫な記憶や経験をまとめる一助となるだろう。

Jejak-旅 Exchange で初めて見たパフォーマンスはピチェ・クランチェンの「I am a Demon」だった。ケダイ・ケブン・フォーラムという、ジョグジャカルタのコンテンポラリー・アートシーンの中心に位置するレストラン/アートスペースの2階での上演だった。作品は、ピチェがタイの伝統的な宮廷舞踊である「コーン」の師から学んだ技法を舞台上で再現するというもので、彼が十代のころに習った悪魔の役の演じ方が扱われている。

パフォーマンスには、ピチェ自身が師にインタビューする様子や、共に振付を練習する様の映像も用いられている。この自伝的な作品は、過去をどのようにして現在に伝えるのかについて、また、現在という地点から過去がいかに解釈され得るのかという問題について、ひとつの視座を与えている。



パドミニ・チェターの「Beautiful Thing 2」も記憶に残るパフォーマンスだ。パドミニの作品は、美術ギャラリーの地下階の、空っぽの部屋で上演された。彼女は空間を分かつ柱の間でゆっくりと舞っていた。彼女は動きの速さではなく柔軟性と力とで、パフォーマンスに勢いを作り出していた。ピチェ同様、彼女もまた、インド現代舞踊の振付家である師のチャンドラレーカーから受け継いだメソッドを用いて踊っているのだった。

ジョグジャカルタ編では総じて現在と過去の射程という問題が強調されていたように思う。アジアにおけるパフォーマンスの具体例を通して、さらに、アーカイブ展示や公に開かれたディスカッションを通して、この射程を辿る構成になっていたのだ。先に触れた2作品では、振付家／舞踊家が自らの身体やパフォーマンスをどのように考えるのかについて、世代間の認識の変容が扱われている。パドミニは、師であるチャンドラレーカーの技法をより洗練させ、自らの振付のなかではタイミングや、時間の経過といった要素を重視している。一方、ピチェは自らがコーンにおいて演じる悪魔という役をまったく別の文脈に置き換えている。この「キャラクター」と、自らの間の対話を通して、ピチェはコンテンポラリーな舞台芸術のサーキットで活動する伝統的な舞踊家として、自らが持っている身体の知識について省察するのだ。しかし私にとっては、世代間の考え方の変容を促している力がつまるところ何なのか、未だ明らかではない。内的なものなのか、あるいは外的な（たとえば市場という）世界の影響によるものなのだろうか？

この現在と過去との緊張関係はインドネシア編でも重要な題材となった。例えば、私がリン

ダ・マヤサリと共に構成したバゴン・クスディアルジョとヴィシュヌワルダナをめぐるアーカイブ展ではこの振付家たちがアメリカで舞踊を学び、その後新作を作り出す過程を展示した。当時、彼らの踊りはインドネシアでは不可解なものとして扱われたのだった（クスディアルジョのとある作品はメディアからは一貫してスポーツとして扱われた）。

なので、ジョグジャカルタ初めて開催された時からJejak-旅　Exchangeでは、アジアにおけるパフォーミングアーツの射程について特に現在と過去の緊張関係やアジアにおける実践が、ときにヨーロッパのプロデューサーやフェスティバルが媒介となることで相互に接続／分離する力学について扱うことになっていくのだろうと私は考えていた。





ムハンマド・アベ
（ジョグジャカルタ）
俳優、リサーチャー

その2年後、私はロハスシティへ向かう飛行機に乗っていた。飛行機の旅は24時間近くかかった。ロハスはインドネシア東部諸島のマウメレやララントゥカといった町によく似ていると感じた。インスタント麺をいくつか持っていたので、宿のスタッフに差し入れたところいたく感謝されたのが印象に残っている。ロハス・シティにきたのは、フィリピン教育演劇協会（PETA）の舞台芸術の実践が、インドネシアに与えた影響についてプレゼンテーションをするため、そして、ロハス・シティで行われるプログラムに私自身も参加するためだ。正直にいうと、私のプレゼンはかなり拙いものだったのだが、参加してくれた現地の高校生たちが非常に熱心に聞いてくれていてとても驚いたのが記憶に新しい。

彼らが熱心にセミナー／ディスカッションに参加してくれたのは驚きだった。インドネシアではアート関連のイベントや芸術祭が高校で開催されたり、ましてその高校生たちが芸術祭のプログラムに招かれるなどということは極めて稀だ。ロハスシティの学生たちはどのディスカッションやパフォーマンスでも非常に熱心だった。きっと彼らのなかには、ジョグジャカルタの事など聞いたこともないという人も居ただろう。彼らから非常に良い問いがたくさん投げかけられたのを覚えている。

また別のセッションでは観客のひとりが芸術が闘争の手段になり得るという事にまつわる自らの体験談を涙ながらに語ってくれた。今やアートとは美的な探求や芸術的な達成に限られるものではなく、正義を伝え、暴政に対して声をあげるための方法なのだ。ロハスでのJejak-旅 Exchange はジョグジャカルタでの経験とはまったく違ったもので、とても思い出深いものとなった。ロハスで取り上げられた作品は上演も映像作品も、草の根のコミュニティと共に、特に中・下流市民と共に活動するアーティストたちの仕事であった。こうしたアーティストたちは活動を通しておおきなリスクを取っている。 美的なリスクではなく、実際にその身体を脅かされるかもしれないという、セキュリティ上のリスクである。

ロハスシティで見たパフォーマンスのなかでも特に力強かったのは、マニラの対麻薬戦争をめぐるドキュメンタリー演劇だった。「Monster's War（怪物の戦争）」というこの作品はSIKADのエドウィン・クインサヤスが演出したものだ。作品で取り上げられているのは、議論の的となってきた超法規的殺人の影響を受けた人々だ。パフォーマンスを通して私たちは、 警察に人を殺す許可を与えたこの対麻薬戦争を通して、マニラのスラム街で、麻薬密売人と疑われた多くの人の命が失われたことを知る。そして俳優の一人は多くの物議を醸したこの法律の、最初の犠牲者の実際の妹なのだと、上演も終わりに差し掛かった頃、観客は知るのだ。

SIKADによる上演は簡素なものだ。背景には映像のプロジェクションだけがあり、俳優はその映像に映し出されているのと同じ場面を演じる。俳優たちはその場面を演じながら実際にその場で何が起こったのか、詳細に解説する。被害者の家族への取材を通して構成されているのだ。私が興味深いと思ったのは、ロハスシティの市民や学生の多くが、対麻薬戦争でこれほど罪のない命が奪われているということを知らなかったらしい、ということだ。メディアを通して自らの暮らす地域にまつわる情報にたくさん触れているように思われても、実際に何が起こっているのか、我々は案外知らないのかもしれないと、ここに至って感じた。アジアのアートコミュニティに関しても、同じことが言えるのかもしれない。

Jejak-旅 Exchange を通して、 私たちはアジアの舞台芸術をマッピングし、 その射程を知り始めているように思う。 Jejak-旅 Exchangeは3つの都市を彷徨ってきて（ジョグジャカルタ、 クアラルンプール、 ロハス・シティと、 オンラインも足せば沖縄県の那覇市も）、 それぞれの都市でアジアにおける舞台芸術の歴史と未来にまつわる問いが挙げられてきた。 Jejak-旅 Exchange がこれからもアジアを彷徨い続け、 様々なアートのコミュニティをこのプロジェクトに繋ぎ続けることを願っている。



フィッキー・ トリ ・ サンジャナ（観客、ジョグジャカルタ）

“Jejak-旅 Exchange は、ローカルなものと繋がり、その一部になっていこうとしているという点で、 国際的なイベントのなかでもユニークで面白いものだと思います。ジョグジャの様々な会場、グループや財団とオーガナイザーとして協力関係を築いているというのがこのフェスティバルを他の地域で行われているものと分かつ点だろうと思います。アートにまつわる集団／スタジオ／コミュニティのクリエイティブなプロセスに関わっている人たちが、ワークショップ参加者として、そして観客としても関わっていることで、非常に親密で温かな雰囲気が作られていると思います。”

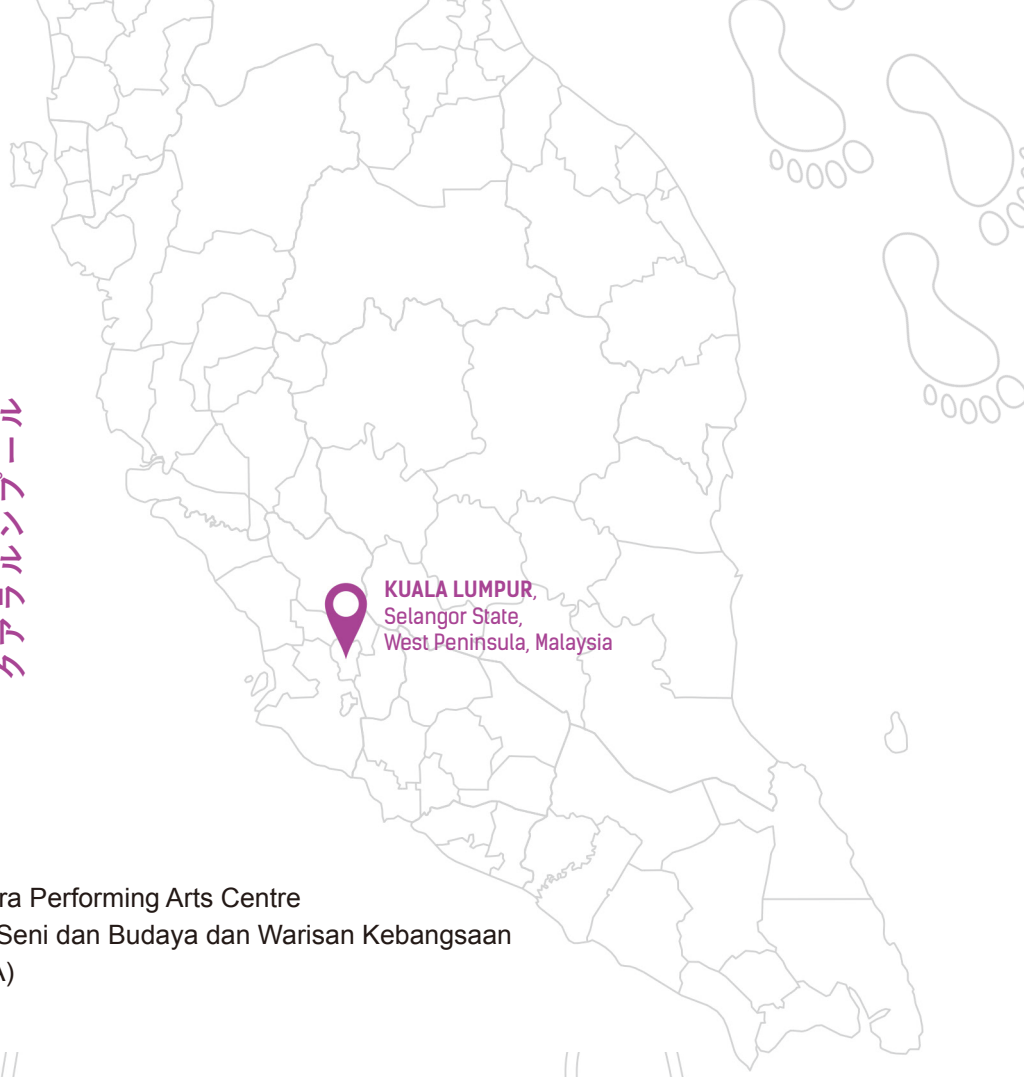


リンダ・アグネシア・マヤサリ
（セメティ・アートハウス、ジョグジャカルタ）

“Jejak-旅 Exchange という、この小さな旅するフェスティバルは、私に複雑な経験を与えてくれました。その手口は、キュレーションと作品の上演とを往還し、この二つの側面が互いに影響し合うというものでした。国際的な場で上演されてきた重要な作品が、おそらくこの機会がなければ作品にアクセスすることのない観客の元に届けられ、各地域の作品と対話することになったのです。Jejak-旅 Exchange の交流は、芸術面にとどまりません。制作面でも、各地のパートナーは単なるホストではなく、リサーチのうえでの協働者として考えられ、企画全体のあり方に言及することができます。これは、キュレーター／イニシエーターにとってもJejak-旅 Exchange で作品を上演したアーティストたちにとっても、深い思索を促しました。普段は世界規模の舞台で作品づくりをしている者が、ジョグジャの路地に分け入り、マントリジェロン地区に心身共に浸かりながら、非常に丁寧にオーガナイズされつつも、思索的ではあらざるをえない、具体的な、ローカルな状況に向き合うことになったのですから。これは非常に骨の折れる経験には違いありませんが、複数会場でのプロジェクトとして、舞台上での出来事だけでなく、制作面での関係性から、あるいはセメティ・アーツ・ハウス周辺の小さな屋台やカフェでの会話から、身体にまつわる美的な経験や知識を拾い上げる事ができるようになったという点で、とても刺激的なものでもありました。”

KUALA LUMPUR MALAYSIA 2018

クアラルンプール



500 m

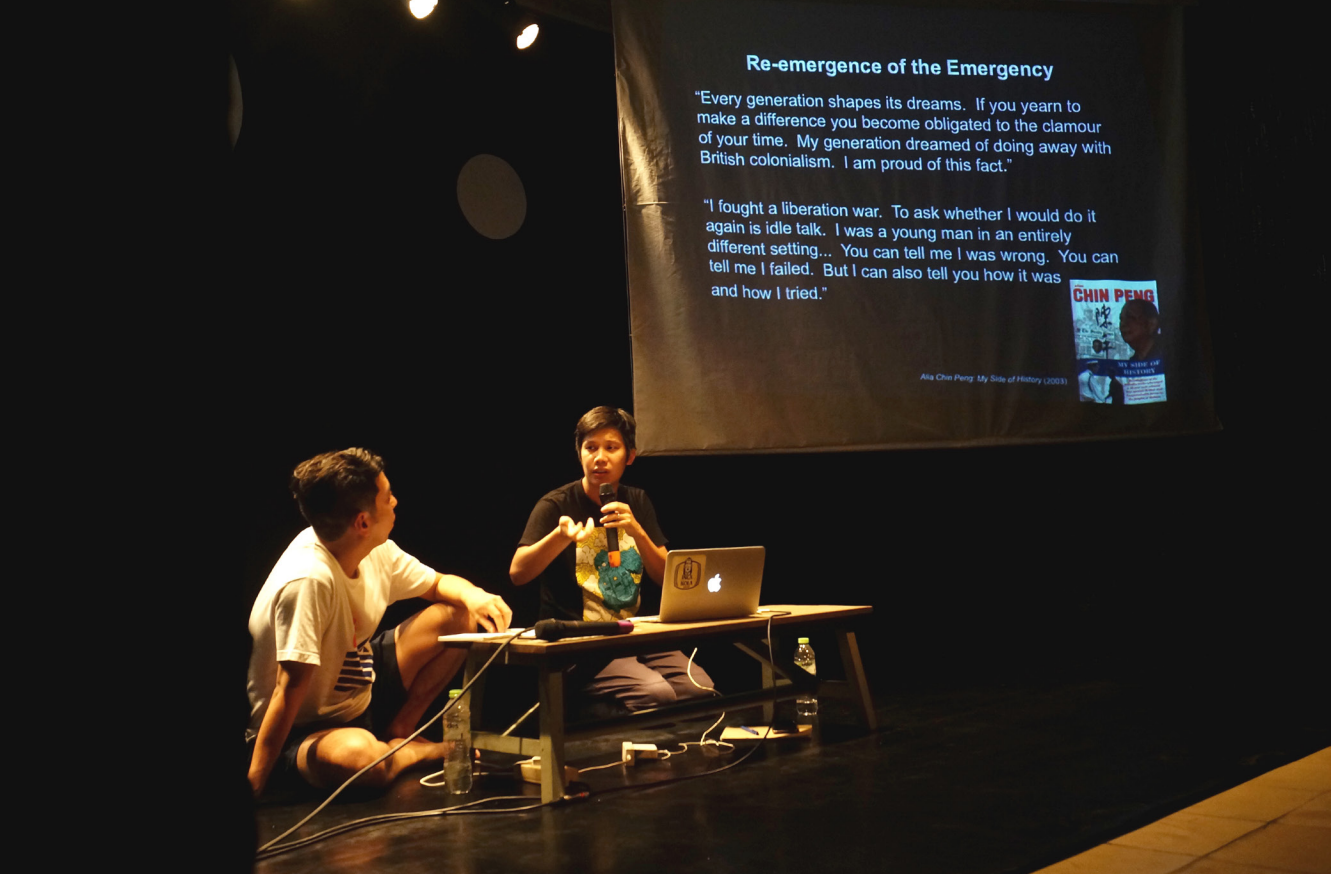
❶ Damansara Performing Arts Centre

❷ Akademi Seni dan Budaya dan Warisan Kebangsaan (ASWARA)




© Kelvin Chan
those lips my lover, load of
experience of embodiment
f the most eminent
qualities


© Kelvin Chan



ON *JEJAK–旅 TABI*

マーク・テ

マレーシアでは特に厳しかった8月の終わり、ムルデカの前夜にこれを書こうとしている。明日で1957年に英国から独立して64年になる。あと30日でファイブ・アーツ・センターが1998年以降、拠点としてきた建物から荷物をまとめて出て行かないといけない。先の日々は、不穏と不安定さに満ちている。発令中の「移動管理条例」の規制は分かりにくく、我々は引っ越し自体は許されているのだが、撤去工事はしてはいけないという事になっている。私たちとしては、クアラルンプールの端にある今のスタジオから、木の床板を抜き出して、旧中心市街にある新たなスペースでも使いたいと思っている。足元の床もまたjejak（歩行）し、旅したがっているのだ。どうなることだろう。

思考は散漫である。身体こそ何とかバラバラにならずに済んでいるが、
長くは保たなそうだ。

時代／誤差

2018年の7月から9月にかけて、ジョグジャカルタとクアラルンプールで Jejak-旅 Exchange の第1回が開催された。比較的最近の出来事であるはずなのだが、今となってはまったく別の時代の出来事のように思える。COVID-19パンデミックによって、我々の「jejakしたい」－彷徨い、交流し、越境したい－という欲望は、現実味に欠けた途方もないものになってしまった。根源的、実存的な変貌が社会を取り巻くなかで、私たちはまだ学び、あるいは学びほぐしながらこの状況に適応しようとしているのだ。

この3年間、東南アジアではほとんど一様に権威主義が加速化し、政治的な二極化が進んだ。それに応答する形で、新しい世代による運動やレジスタンスが活性化した。2019年には明仁天皇が退位し、30年にわたる平成の世が終わりを迎え、新たに令和の時代が始まった。令和の最初の大事件は、多くの物議を醸したオリンピックの開催だろう。五輪は延期され、2021年、空っぽのスタジアムで開催された。一方マレーシアでは、2018年まで、人種差別的な体制の連立政権が61年間にわたって権力を掌握していた。しかし、この3年間で3度も政権が変わっている。マハティール・モハマドが首相となった1981年に生まれた私は、23歳になるまで他の首相を見ることがなかったといえば、本国がどういう政治的な状況にあったか、読者にも少し実感してもらえるだろうか。私の息子のリアムは2019年初頭、私と同じく（第二次）マハティール政権の最初の年に生を受けた。二歳半になる息子は、既に3人の首相の政治を経験している。グラスは半分空っぽなのではなく、半分だけいっぱいなのだ、と、かろうじてポジティブに考えようとしている。

食事と代謝

Jejak-旅 Exchange には多くの鮮やかなイメージや思い出が残っている。パトミニ・チェター、ピチェ・クランチェン、ナターシャ・トンテイとグスバン、アユ・ペルマタ・サリ、アリエンドラ・イエヌ、手塚夏子、そしてヴェヌリ・ペレラの果敢で寛大なパフォーマンス。アジア各地で文化活動に従事する人々が、それぞれの文脈、課題や実践のポテンシャルを比較した、刺激的なディスカッションやラウンドテーブル。しかし、いま一番思い出されるのは、食事や酒の席で、あるいはイベントの間の待ち時間に交わした断片的な会話だ。いわば、本来予定されていたプログラムの間脇道で－いわば*jalan tikus*（鼠の通り道）*で－副次的に発生した緩やかなやり取りだ。

ある夜、終演後の食事の席でヘリー・ミナルティに、ジャカルタからジョグジャカルタに拠点を移したことについて尋ねてみた。ヘリーはジャカルタに－自分が生まれた街に－対して抱えている疲弊感やある種の幻滅を語ってくれた。二つの都市の文化的なコミュニティの特徴や、その魅力や葛藤について、それぞれの街で仕事をすることについて、彼女は語った。また、ジャカルタとジョグジャでは物事のペースや生活のリズムがまったく異なることも詳細に話してくれた。そして、自分の身体や感覚と波長の合う「代謝」を持った場に身を置きたいのだと言った。

* *jalan tikus*, 直訳すれば「鼠の通り道」という意味の言葉は、マレー語やインドネシア語で「裏路地」という意味を持つ。

またとある食事の席で－ジョグジャで、参加者とオーガナイザー全員が集まる大規模なウェルカムランチでのことだった－私は中村茜と、彼女のやんちゃ娘であるモネを見ていた。全く異なる「代謝」で生き、時に重なり時に反発し合う母と娘。茜は、幼い子どもを育てている人間だけが身につけることのできる鋭敏な周辺視野を遺憾無く発揮していて、さながら多焦点性の実験でも見ているようだった－プロデュースし、プログラムを組み、同時に子を育てているのだ。一方、モネは常に動き続けていた。テーブルや大人たちの間を縫うように動き回り、遊び、演じ、指をさす。私の妻が妊娠していると知った茜に「子どもができて、あなたの作品がどう変わるか楽しみだ」と言われたように記憶している。



雄大と私

最初の Jejak-旅 Exchange で、キュレーター陣の茜、ヘリー、そしてリム・ハウニエンに、私と演劇作家の神里雄大は、二本立てのプレゼンテーションを依頼された。セメティの会場で自らの作品における歴史的、個人的、国家的なるものの交わる地点について話してほしいという事だった。キュレーターたちとしては、私たちの感性に何か近いものを感じたのだと思うが、いざリサーチの仕方や創作方法について語り始めると、二人の方法論は驚くほど異なっていて、思わず笑ってしまうほどだった－つまり、マークはめっちゃオタッキーな文献調査とフィールドワークに夢中になり、雄大は酒を飲みに行くこと自体が方法論になっていて、飲んでるうちに赤の他人から素晴らしい物語を引き出してしまうという対比。フハハ。

やがて、雄大と私は、沖縄／琉球諸島を共に巡りそ れぞれ独立したリサーチプロジェクトを一緒に進めるという試みを行った。 2019年12月のことだった。8つの島を渡り、車を運転して回り、地元の博物館や醸造所、闘牛のアリーナ、自殺の名所や戦争記念碑などを巡った。琉球で仕事を得たり、結婚するために、フィリピンや日本各地から多くの女性が移住してきた歴史があるという事を知った。我々は食べ、飲み（過ぎ）、見知らぬ人や新たな友と出会った－偶然の出会いや即興的な決断を大事にしていた。そしてこの旅を通して、雄大と私は友になった。





ここに雄大の写真が2枚ある。1枚目はセメティ（ジョグジャカルタの会場）で、 私が初めて雄大に会った日のものだ。Jejak-旅 Exchange の初日だった。雄大は髪を切ったばかりである。 彼は新たな都市を訪れるとそこで必ず髪を切るというのを儀式のように続けているのだ。 2枚目は、最後に実際に雄大に会った2020年の2月のものだ。バンコクのレストラン「沖縄金城 」の前に立っている。私がキュレーションをつとめたプロジェクト「呼吸する地図たち」の一環として、雄大をチェンマイに招いたときのものだ。彼は沖縄に特有の酒である泡盛の由来を調べていて、どうやらその一つの原点が、西暦1400年頃、当時のタイと琉球王国の間で行われていた交易にあるらしい事が分かってきたのだ。この写真を見ると、雄大がいつも世界中に－南アメリカや東南アジアを旅するなかで－沖縄の形跡を探し続けていることが思い出されるので、とても気に入っている。雄大はバンコクで沖縄料理が食べられることをとても喜んでいたのだが、いざ店主と話してみると残念ながら彼の出身地は東京だということだった。フハハ。



© Mark Teh



© Yudai Kamisato

近年、マニラのグリーン・パパイヤ・プロジェクトからシンガポールのサブステーションまで、 多くの文化芸術機関が深刻な問いや課題に直面している。それはつまり、どのようにその活動を持続し、生存するのか、ということだ。パンデミックが文化セクターに大打撃を及ぼす前から既にこうした問題は存在していた。Jejak-旅 Exchange のジョグジャ編という機会を得て、私は、かつて訪れたジョグジャのアーティスト主導のスペースを再訪することができた。2006年頃にジョグジャ、ペナン、バンコク、チェンマイ、そしてチェンダオをめぐるロードトリップをした時に出会った人々だ。このとき再開した人たちと、特にテアトルガラシと「セメティー芸術と社会のための機関」 のメンバーたちと交わした会話が、いまファイブ ・アーツ・センターが新たな始まりを迎えようとするなかで、特に重要なものに思われる。

ガラシやセメティの活動の射程は37年間活動してきた我々のコレクティブのそれと重なる。その並行線を眺めることで、時事性、再生起、活動の組織化などにまつわる問いが浮かび上がってくる。活動を続けることで、自らの組織／機関自体のほかに何が持続されているのか？文化的なコレクティブとして変化をどのように活動の糧としていき、その変化を批評、ドラマツルギー、社会への応答に紡ぎ直していくのか？ どうすれば所属や所有といった自己充足的な考え方を越えて、多くの人と共に知識を生産し、身体化し、循環させることができるか？「インディペンデント」なイニシアチブの間の協力体制、レジリエンス、寛容さなどを体現するメタファーや方法論はないだろうか？芸術、文化、社会／政治、エコロジーなどを包摂するより広範な生態系のなかの新たな、 あるいはこの先出現するであろうギャップとして、どういうものが想定され得るだろうか？そして、集団による創作や芸術的／知的な生産行為を通してどのようにこうしたギャップと弁証法的に向き合う事ができるだろうか？

ジョグジャとKLでのリンダ・マヤサリとの会話は、何十年も運営されてきた組織やコレクティブにおいて、責任を 「継承」する立場の者の喜びと苦労を分かち合う機会で、多くの共感と笑い、そして開放感を私にもたらしてくれた。この継承のプロセスは、決して平坦な一本道ではない。リンダは、セメティの進化の歴史を語ってくれた。1988年にセメティ・ギャラリーとして設立され、後にセメティ・アートハウス、さらに2017年からは、 セメティー芸術と社会のための機関として活動してきた。近年の「生まれ変わり」は新たな方向性を示すものだ。新たなディレクター／キュレーターのチームにより、社会的、政治的な問題を原動力とする芸術実践や市民運動へのコミットメントが掲げられている。

ファイブ・アーツ・センターが23年の宿を離れて新たなスペースへ越すなかで、 過去18ヶ月間の失意と倦怠感は、慎重ながら前向きな感情と、新たな章の始まりへ向かう確信に変わりつつある。何を捨て、何を取っておくかを決め、荷造りをするなかで、こうした問いが未来を示す羅針盤になってくれるだろう。



マーク・テ
(クアラルンプール)
パフォーマンスメーカー、リサーチャー、キュレーター。ファイブ・アーツ・センターのメンバー



ナフィク・アリフィン
（ダンサー／振付家、クアラルンプール）

“まず、この Jejak-旅 Exchange というプログラムに関わる事ができて光栄です。2018年のプログラムでは、自らの作品について他のアーティストと議論し、アイデアを交換する良い機会でした。こういった対話は、 作品の成長には欠かせないことだと思います。沖縄の組踊のワークショップからも多くを学びました。講師は熟練の踊り手で、背景や技術をわかり易く、明瞭な指示で伝えてくれました。お招きいただきありがとうございました。”

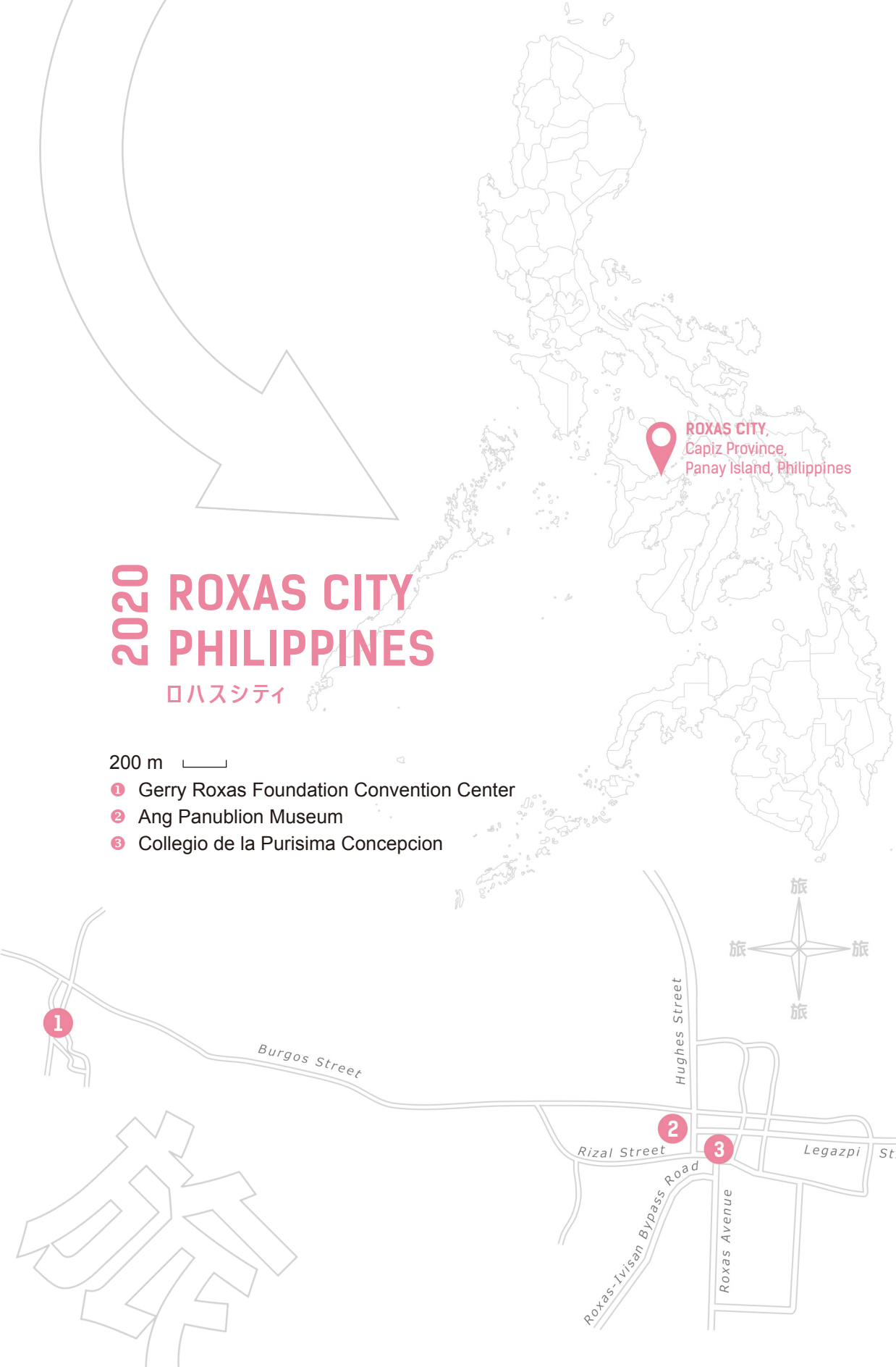
イエフィズ・アラウディン
（演劇実践者、ASWARA、クアラルンプール）

“芸術はコミュニケーションの形態だ。Jejak-旅 Exchange は舞台芸術の実践者にとっては、いわば至れり尽せりの旅先で、そこに行けば寛容で温かな雰囲気のなかで、互いにアイデアや実践を交わすことができる。最初の会期（2018年のジョグジャ&KL）に関わることができて、本当に幸運だったし、誇りに思っています。目から鱗の経験で、異なる背景のアーティストに出会うことができて感謝しています。”



ファシャーリ・ファズィル・ビン・サイフル・バーリ
（演劇実践家、ASWARA、クラルンプール）

“私はJejak-旅 Exchangeには最初の会期から関わっています。ジョグジャカルタでは参加者として、KLでの2回目の会期ではASWARAの同僚たちと共に、共同オーガナイザーとして関わりました。2021年ASWARAは再び、オンラインワークショップのシリーズを共同で主催することになりました。このプログラムは私に周縁都市での芸術、文化と、人々について教えてくれました。ほかの会期で取り上げられた都市のなかではKLはよく知られた方だとはいっても、商業的な文脈から離れたところで活動しているアーティストや実践はとても豊富です。またこのプログラムに参加し、注目されることの少ない都市の文化芸術やその実践、そこで暮らす人々について、理解をアップデートしていきたいと思っています。”



2020 ROXAS CITY PHILIPPINES

ロハスシティ

200 m

1. Gerry Roxas Foundation Convention Center
2. Ang Panublion Museum
3. Collegio de la Purisima Concepcion



© Yuji de Torres



© Yuji de Torres

© Rick Vicmar Ambrosio



彷徨える女王たちと踊る：JEJAK-旅 EXCHANGEをめぐる省察

ノルベルト・ローランド

（日本語短縮版）

このエッセイで、ノルベルトローランド－友人や同僚からは愛情を込めてピーウィーと呼ばれる－はまず、中村茜とヘリー・ミナルティというJejak-旅 Exchange プログラムの三人のキュレーターのうち二人との出会いを時系列に沿って雄弁に振り返っていく。この二人からグリーン・パパイヤ・コレクティブの共同設立者である彼に、共同キュレーター／オーガナイザーとしての協力を求める依頼があったのだ。

Eメールや対面の会話など、2018年後半から2019年にかけてフィリピンで行われたリサーチ旅行に際するいくつかのやり取りを通じてJejak-旅 Exchange の第二会期では、フィリピンのビサヤ諸島、 ネグロス島と沖縄県那覇市の文脈を接続する企画が行えないか、という対話が始まった。

ピーウィーはネグロス島のなかでもエスカランテという小都市に注目することを提案した。「マルコス政権の終わりにかけて行われたエスカランテ虐殺の追悼として、 エスカランテでは毎年事件の再現とパフォーマンスが行われる。 観客にとってはこのフェスティバルを見る機会になるかもしれない。当時、軍隊は市民会館の前に集まった群衆に向かって発砲し、何百人もが負傷し、20人が命を落としたのだ」と。当初、虐殺の起こった日に合わせ2019年9月20日にエスカランテでJejak-旅 Exchange が開催できないか検討されていたのだ。

しかし、エスカランテとバコロド・シティで開催が予定され、綿密に計画されていたこの企画は、現地での暴政がエスカレートしてきたことで諦めざるを得なかった。ピーウィーによれば

「2019年9月18日、エスカランテ虐殺の追悼を準備していた文化活動従事者や活動家たちの乗る車が、街へ向かうハイウェイで警察と軍隊に呼び止められた。彼らは武器と爆発物の違法所持で逮捕、送検され、警察署に連行された。逮捕された8人のうち4人は劇団の副代表を含むテアトロオブレロのメンバーであった。北ネグロス人権代表連合団（NNAHRA）によれば、 武器と爆発物の発見は警察による偽装であったという。逮捕された者は未だ収監されたままである」

「ファシスト政権下のネグロス、ひいてはこの国全体の政治的な状況の不安定さを鑑みて、Jejak-旅 Exchange をエスカランテで開催することが現実的か、 慎重に再検討しなければならない。活動家の逮捕もきわめて日常的に起こることだが、2016年にデュテルテが大統領になってから、地方では農民や人権活動家が殺され続けている…… 私たちはJejak-旅 Exchange の開催の障壁となり得る問題を見定めようとした。 仲間たちが出した最終的な結論と、それを元にした提言は、今はこうした活動をネグロスで行うべきではない、 という事であった。」

まず代わりに隣のパナイ島にあるイロイロ・シティで開催ができないか検討がなされた。しかし、ピーウィーは本能的にロハス・シティで開催すべきだと感じていた。2018年には、そこで2つの国際的イベント－東南アジア・アーティスト・レジデンス・ミーティング（SEAARM）と、ビバ・エックスコン・ビエンナーレ－の開催に関わったというのも一つの理由であった。「どちらのプロジェクトも、 大きな問題なく開催することができた。グリーン・パパイヤは地元の行政からもコミュニティからも支持を得ていて、 自分たちが市内に持つ拠点も有効活用することができる」

日程は2020年1月22～25日に決まった。

「我々が唯一直面する難しい決断は、 テアトロ・オブレロの二人のメンバーにエスカランテ虐殺にまつわるプレゼンテーションをしてもらうため、バコロドからイロイロまでフェリーに乗り、そこからさらに3時間のバスに乗り、この街へ来てもらうのか否か、という事であった。移動の間は常に監視され、逮捕される危険が伴う。最終的には二人の安全を守るため、参加は取りやめてもらう他なかった。 しかし、彼らの仲間が代わりに話をしに来てくれた」

最終的には、ロハス・シティ編はうまくいった。地元の参加者の多くが学生や教師であった。「多くの参加者が時に戒厳令時代

の苦しみを思い出しては涙しながら、70～80年代のフィリピンと東南アジアにおける演劇の動きについて真剣に議論する様子は、感動的だった。デュテルテの対麻薬戦争を扱ったドキュメンタリー演劇である「怪物の戦争」の上演や、山城知佳子の「土の人」の上映を通しても、人々の苦痛が感じられた。



ノルベルト・ローランド（マニラ）
アーティスト、キュレーター。グリーン・パパイヤ・アート・プロジェクトのディレクター

Jejak-旅 Exchange のロハス・シティ編は今のところ、こうした有意義な国際事業の最後の思い出になっている。2021年7月、再びオンライン開催を余儀なくされたこの企画の開催のため、ピーウィーとそのチームは多大な障害があったにも関わらず、協力した。

「予測不可能で不安定な中にあっても、Jejak-旅 Exchange という仕事は楽しく、多くを得ることのできるものであった。さながら、彷徨える女王たち、ヘリー・ミナルテ化中村茜と共に、雨の中で踊っているかのような気持ちだった」と彼は振り返る。




© Rick Vicmar Ambrosio


© Yuji de Torres

西ビサヤの文学と歴史における フィリピン女性の進化　梗概*

マ・セシリア・ロクシン・ナヴァ博士

「西ビサヤの文学と歴史におけるフィリピン女性の進化」という18ページの論文において、フィリピンのネグロス諸島、バコロドに居を構える研究者であるセシリア・ロシン・ナヴァ博士は、植民地主義がいかにしてビサヤの文学から女性のキャラクターを消去したかを詳細に検証している。彼女はまず、スペインによる植民地化以前、西ビサヤの民俗文学において、いかに力を持った女性のキャラクターの描写が盛んであったかを確認する。神話的な名を冠したこの女性たちは、ときに神懸かりな能力を有する。超能力を持つララホンや、 死者を蘇らせることのできるルブルバンが好例である。

「女性たちは、単なる人的資源や変化のメディウムではなかった。植民地化以前、女性たちは生殖能力を有するからという事ではなく、その優れた聡明さや洞察力に価値を見出されていたのだ。

バスコムによれば、民間信仰からは人々の思考、信仰、感情、目標や願望を窺い知ることができる。よってこうした記述が歴史を通じて再強化されていくのも驚くには値しない。スペイン化以前のフィリピン社会における3本柱－ダトゥ（政治的リーダー）、パンダイ（職人）、ババイラン（シャーマン）のうち、ババイランは一般的に女性が担う、社会の中でも最も複雑な役割であった。超人的な力を持つババイランは、治癒者、歴史家、芸術家、儀式者、巫女、心理学者であると共に、天文学の知識で経済活動を導く科学者の役割も担ったのだ。

また、ババイランは、フィリピン社会の政治的エリートが外敵勢力に吸収されて以降の武力闘争のなかで、おおきな政治的影響力を持った。スペイン侵略者の当時の日記には、デュピナガイ、モニカ・ガポンやアグスティナ・ヒティコンといった高名なババイランが先導する激しい抵抗運動に遭い、パナイ島の先住民俗多神教の撲滅に失敗したという不満が記されている。

植民地化以前、フィリピン女性は男兄弟と同様に教育を受け、男性と平等に扱われた。子どものうち最年長であれば、性別に関わらず両親の遺産を受け継ぐことができた。婚姻後も自らの所有品を持ち、姓を変



* 本稿は要約版の日本語訳です。
完全版（英語）は
https://bit.ly/3zyIfMZ
または QR コードを読み込んでご覧ください。

えることもなく、子どもを何人産むかという事にも自己決定権があり、夫の結婚時の持参金をその家族に返還さえすれば、いつでも離婚しまた再婚することができた。離婚にあたっては、夫婦の稼ぎの一部と、子どもに対する権利の一部が認められた。

皮肉なことに、「優れた」スペイン文化の輸入によりフィリピン女性は多くの権利を失い、それは未だ回復していない。植民地主義の来訪と共に、力強いフィリピン女性たちはスペイン王朝期のか細く、弱々しく涙もろいヒロインたちに追いやられていった。結婚までは貞節を守り、その後は多くの子を設け、死ぬまで何もかも耐え忍ぶ事が求められるようになった。鍵となったのは侵略者たちがフィリピンに持ち込んだスペイン黄金世紀の価値体系である。コンキスタドールたちが自らの政治体制を持ち込み、フィリピン社会にそれを移植したことで、フィリピン女性をめぐる社会的構成は一変したのだ。フィリピンの神話では、一本の竹が割れて男性と女性になったといわれ、両者は対等な立場にあったが、父権的なユダヤ－キリスト教的文脈において、女性は「第二の性」となったのだ。

以降の部分でナヴァ博士は、伝統的歴史学者の男性中心的な視点をその複雑な射程から検討し、言説の推移に着目していく。そしてこうした研究者の手による書物を批判的に読み直すことによって、ババイランの精神が復活するのだ。

「幸い、『1970年代に起源を持つ社会政治に対する政治的／外交的アプローチの強調からの転換』によりフェミニズム歴史学者は、他領域（社会学、心理学など）から得た新しい手法（ライフストーリー、系譜学、証言やインタビュー、エスノグラフィーなど）によって伝統的歴史学者がこれまで客観性を欠いた『文献にあらざれば資料にあらず』のアプローチによって女性に対して行ってきた非道を正すことができるのだ。」

マ・セシリア・ロクシン
ナヴァ博士
（パコロド）
西ヴィサヤ文学／文化
研究者





MJ アパタン(文化芸術実践者／エスカランテ)

“Jejak-旅 Tabi Exchange Roxas はアジアの現代アーティストたちによる魅力的な交流プログラムでした。アジアにおける文化的、政治的な多様性、独自性、そして多彩な射程を捉え、表現するものでした。 様々な同時代のパフォーマンス作品を通して、観客の意識が地域社会のリアリティへ向かっていたのを感じました。

個人的な体験としてはJejak-旅 Tabi Exchange は、反勢力の脅威にさらされる文化芸術の実践者としての、自らの立場を改めて定義し、再構築するきっかけになったと思います。芸術を通してそれぞれのコミュニティを育んでいる仲間のアーティストたちと経験を共有することで、それぞれの抱える活動における障害や苦悩を垣間見ることもできました。”

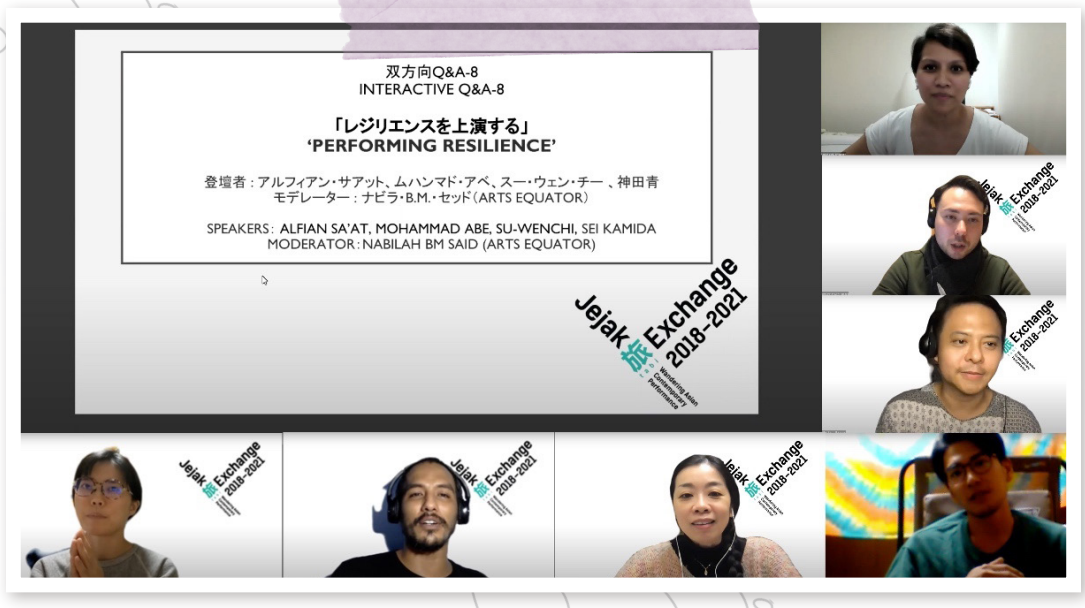


© Yuji de Torres



© Rick Vicmar Ambrosio

BRIDGING EDITION



ROXAS CITY to NAHA, 2020 + Pandemic

ロハスシティ、 那覇



神里雄大「カオカオクラブ・ オンライン」より『カオカオクラブ.mp4』

© Nine Stray Okinawans



9人の迷える沖縄人についての覚書

アルフィアン・サアット

2018年の2月、沖縄に旅行した。旅には、東京を拠点とする日本の劇団「shelf」のメンバーが同行してくれた。戦争の記憶にまつわる作品を共に作る予定だったのだ。かの靖国神社や、右翼史観で名高い遊就館など、既に東京ではいくつかの場所を取材した。慰安婦や傷痍軍人にまつわる博物館なども訪れた。

当時の旅の記録がある。

沖縄に来て最初の夜、沖縄出身の俳優である今回のコラボレーター、沖渡崇史が運転する車に乗っていると、ふいに土地の36%が米軍基地に占拠されている土地に暮らすことの意味が実感される。

道を取り巻くフェンスによって周囲から切り離されている感覚がある。一般人と軍隊とを切り離すこのフェンスは、土地の人々と他所者とを切り離すものでもある。そしてこの他所者たちは、かつてこの土地を占領し、外敵から保護し、職を提供し、環境を汚している。

次の日、崇史は私たちを、嘉手納基地をのぞむ展望台に案内してくれた。彼はこの基地のすぐ側の町で生まれた。基地が町の中心部のすぐ近くにあるという事が見て取れて非常に驚いた。基地は、沖縄の暮らしから切っても切れないように見える。

排除、所有、主権といった問題について考える。沖縄という土地自体、日本、中国、アメリカの影響がメレンゲのように混ざり合い、地元の琉球文化に覆い被さっている。そうした影響のうち、土地の文化に同化したものは、やがてそこに暮らす者の中を流れる血の一滴となるが、同化しなかったものは、傷跡となる。

沖縄では、博物館にくわえて、ガマや戦争記念碑なども訪れた。残念ながら、 伝統的なパフォーマンスを見る機会はなかった。2020年にJejak-旅 Exchange で沖縄が取り上げられたことで、遅ればせながら、 当時の取材旅行を補足してくれる重要な資料に出会うことができた。 映像配信で観た「9人の迷える沖縄人」という舞台である。

安和学治と国吉誠一郎の作によるこの舞台は、 第二次世界大戦の終戦から70年後、 2015年に初演された。タイトルにある「9人の迷える沖縄人」 というのは、1972年、 本土復帰を目前に控えた沖縄の将来を議論するために集められた9人の登場人物たちのことだ。主婦、年老いた女性、沖縄芝居の俳優、この問題についての「専門家」、独立論者や、復帰を支持する「理論家」などである。

一方、このタイトルはこの人物たちを演じる俳優たちのことも指している。登場人物たちの集うこの討論会は、実は劇中劇である。これは、現代を生きる9人の俳優が50年前にこの議論をした沖縄の人々を演じているという劇なのだ。作品は、飛行機やヘリコプターの重々しい音が響くなかでの溶暗を効果的に用いながら、実に優雅にこの2つの場面を行き交う。

現代の場面では、俳優たちが自らの演じる人物や、その人物たちが掲げる問いに対する批評を口にする。50年前の討論会で扱われるのは、沖縄の経済的自立は可能なのか、基地に依存せずに生活が成り立つのか、日本という国民国家に復帰した場合、沖縄の文化は守られるのかといった問題である。

この、複数の時間が入り混じり様がこの作品の特に面白い点だろう。俳優(という登場人物)たちは過去を振り返り現代沖縄の現実に照らし合わせて、先人の行動を評することができる。一方、1972年当時の人々を演じるにあたっては、 俳優たちはいわば健忘症に陥る必要がある。未来を予見することなどできない人々が、当時抱えていたナイーブさや、 ユートピア的な世界観を真摯に受け止める必要があるのだ。ここには、何層にも折り重なる劇的なアイロニーがある 俳優は、1972年当時の人々が予見した将来像が、いかに現実味のないものか、現時点では未だ知らないという演技をする必要がある。そして観客は、彼らが必死に忘却してその須姿を演じることを、知りながら観ているのだ。

劇のなかでもとりわけ、 2つの場面に興味をひかれた。映像では56分のところ、「専門家」が、沖縄が独立するための方策を語る。 彼によれば英国統治下の香港のような状況を経て、シンガポールのような国になれば良い。「沖縄がシンガポールのような世界規模のハブになれば、 他国が侵略することは難しくなるだろう」というのだ。



実際、私の祖国であるシンガポールと沖縄の状況には類似するところがある。 シンガポールはかつて、東南アジア最大の英国海軍基地を擁した。大英帝国は1938年、急速にその勢力を広げる大日本帝国への抑止力としてこの要塞を作り上げた。 しかし、終戦から20年、英国は東南アジアの主要な基地から兵を引き上げる計画を発表し、1971年には事実、完全に撤退した。

基地の撤退に伴って多くの人が職を失う事への対策として、シンガポールは重工業に集中的に投資し、その結果アジアでも有数の経済力を得た。独立国家沖縄が同様の道筋を辿る可能性があったか、一考に値する。

私が興味を抱いたもう一つの場面もこの「専門家」 のキャラクターを巡るものだった。現代の場面。この「専門家」が、警察官に伴われ、母親と共に病院を訪れていた事が明らかになる。「専門家」 は、過去の場面において米軍基地にまつわる入り組んだ感情を吐露することになるが、現代においても、基地とは複雑な関係を切り結んでいる。基地があることで母は職を得ることができたものの、米兵の車に轢かれるという被害に遭っており、しかもその兵士はおそらく法で裁かれることはないのだ。

まるで、俳優と登場人物が溶け合い、二つの異なる時系列が縫い合わされたかのようだった。時に、セリフを口にしているのが誰なのかは明らかではなかった。俳優は役を演じているのか？ どの程度、俳優自身の苦しみが舞台上に現れているのか？ 過去と現在の間の壁が融け、そこに不可解な通路が生まれ、 二つの傷跡が結びつけられているようであった。

「9人の迷える沖縄人」の俳優たちは、もう変えることのできない過去を演じていた。いや、むしろ、このように演じ直すことでのみ、歴史から大きく逸れない限りにおいて、特定の過去だけは書き変えることができるのかもしれない。では、歴史とは何なのだろう？ 誰も歩むことのなかった道の連なり。数え切れないほど多くの、実現されざる未来。それら全てを引き算した後に残るものが、歴史と呼ばれる。歴史とは、沖縄がもう一つのシンガポールにならなかった場所－夢から醒めてなお、未だ夢の中にあると気づくような場所のことなのだ。



アルフィアン・
サアット
(シンガポール)
劇作家、詩人、
ライター


糸数アブチラガマ
このガマは、全長が約270メートルに及ぶ自然洞穴で、昭和19年7月頃から日本軍の陣地としての整備が始まった。20年3月23日南部が艦砲射撃をうけ、翌24日から、糸数の住民約200名がこのガマに避難した。その当時は、日本軍の陣地・糧秣倉庫及び糸数住民の避難壕として使用されていた。
戦が激しくなり南部への危険が迫ってきた4月下旬頃、南風原陸軍病院の分室として糸数アブチラガマが開設され、5月1日から約600名の患者が担送されてきた。このガマも危険になってきた5月下旬の
軍病院として使用された。病院の撤退後は、重症患者が置き去りにされ、軍からの攻撃などひ
情を極めた地獄絵が展開された。しかし、このガマのおかげで生き延びた人達がいることも忘れ
い事実である。
マで亡くなられた方々の遺骨は戦後、糸数住民と関係者等によって収集され、「魂魄塔」
祀された。
いとかず
糸数アブチラガマ
30m
Itokazu Abuchiragama Cave





神田青（俳優）

2020年 ロハスシティ

“ 中国でコロナが拡大し始めたころで、その頃はこんなにも長く続くパンデミックになるということは想像さえできていませんでした。

フィリピンのロハスシティでアジア各国からのアーティスト、クリエイターの皆さんと交流し、共に同じ釜の飯を食い、想いや経験、ビジョンを語り合ったり、それぞれの国のアートシーンに

ついて情報交換することができたことは、日本人、沖縄人という枠を超えて、アジア人としての大きな肌感覚をもつことができるきっかけの一つになったと強く思います。

ロハスシティにおいて最も印象的だったことは、 フィリピンの政治的現状をほとんど知らない自分自身の無知を強烈に感じたことです。エスカランテマサカーやサトウキビ農園での労働者と権力者の衝突で非人道的なことが起こっていること、そしてプログラムにおいて観劇した薬物にまつわる現状でした。日本では全く報道されない事実に衝撃でしたし、それらのことを現地の方々から直接きくことができたことは大変貴重でした。

フィリピンの歴史や現状について、共感をもつことができたのは、2つ有ります。

1つ目は、プログラムを通して現地の空気や文化、人々との交流の中で文字や単なる情報ではなく、実感として記憶に残っていたからだと思います。2つ目は、沖縄と同様幾多の占領の歴史をもつということです。Jejakに参加させていただき、ビジョンの枠を大きくさせていただきました。

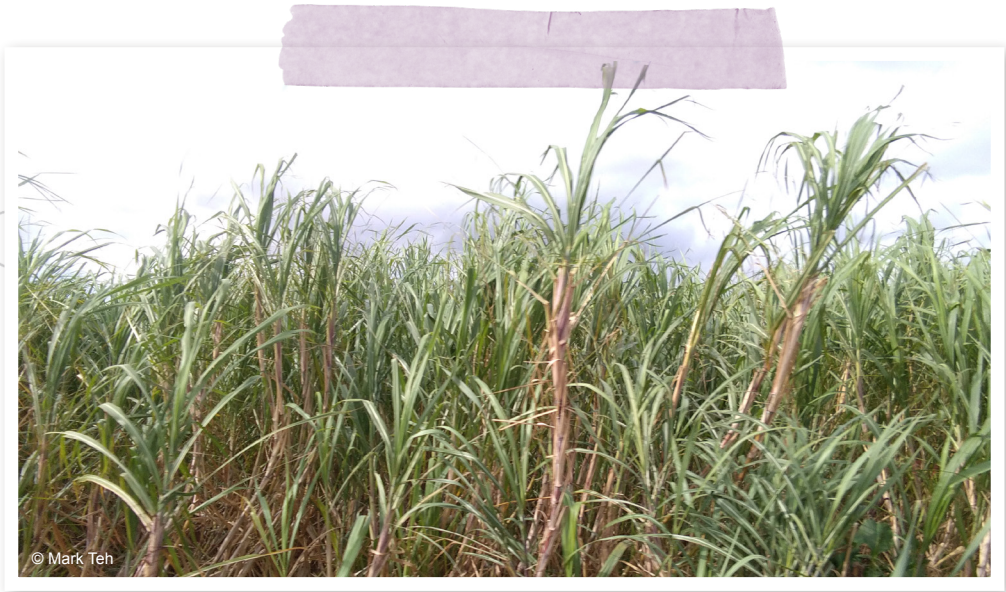
追記

BTF(Bangkok theather festival)2019で同年出場していたフィリピンチームを率いたルディー氏とJejakで再会し、それが縁でフィリピンへご招待いただき、上演予定でしたが、コロナの感染拡大のため、延期となり2020 氏の大学内のオンラインアートイベントに上演舞台を上映することにつながりました。Jejakが我々を再びつなげてくれました。



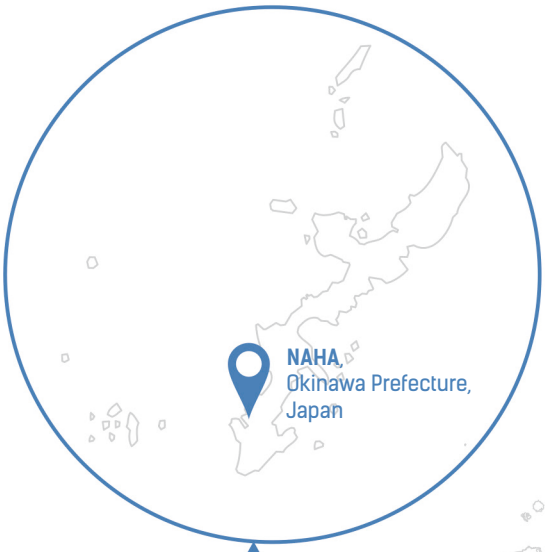
2020年 那覇 オンライン

世界規模での感染爆発が起こり、沖縄や日本でも舞台やイベントライブなど、数多くの上演が相次ぐ公演中止となっていた頃でした。「アートは不要なものなのか」という不安を少なからず抱えていた時期、顔を知るともに明日を語った海の向こうの友とオンラインながらも現状共有したり、この状況においての取り組み、現状の過ごし方、またポストコロナ時代のビジョンを聞くことができたことは、大変心強い気持ちでした。みんな頑張っていると。



これまで誰も経験したことのない状況において、皆パイオニアなのだと、そして、時には立ち止まることも重要なのではないかとだけでなく、思ったことを覚えています。

僕がインスパイアされた考えは、「地域性」でした。地域に改めて目を向けるという観点は非常に共感できました。一方で、ポストコロナにおいては、コロナという全人類が共通の痛みを同時期に経験したことは今後のアートにおいても外せない記憶としてたびたび登場するだろうという意見にも共感できました。」

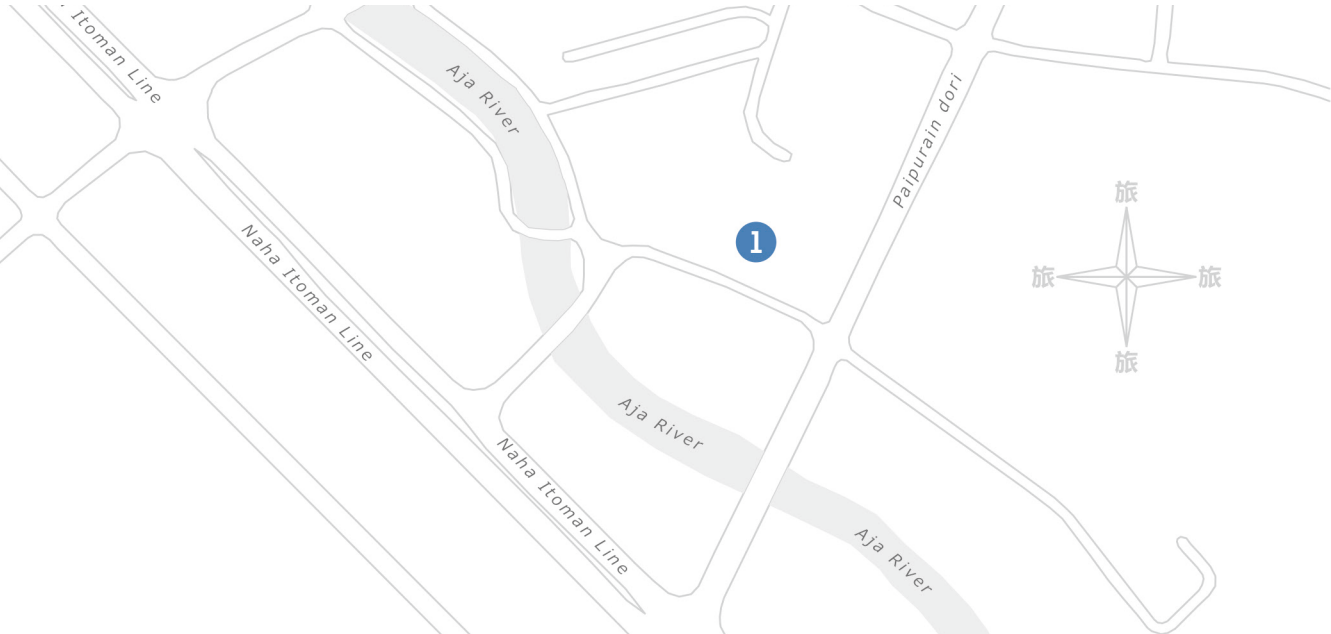


2021 NAHA JAPAN

那覇・オンライン

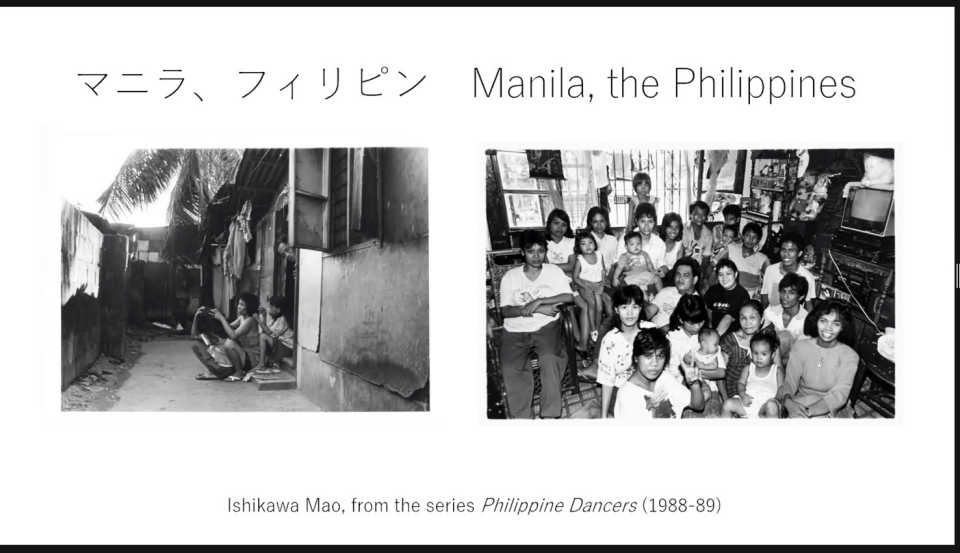
20 m

❶ Mekaru Based











石川真生の写真とフィリピン

亀海 史明

石川真生は1953年、沖縄県大宜味村生まれの写真家である。1971年の米軍統治時代、沖縄の日本への施政権返還協定に反対する大規模なゼネストがあり、まだ高校生であった石川はそこで、機動隊とデモ隊が衝突する現場を目撃した。なぜ沖縄人同士が争わなければならないのかという現実の矛盾を前にして、「この沖縄を写真で表そう」と石川は思い至った。1974年、石川真生というペンネームで写真家としてのキャリアをスタートし、最初のシリーズは、1975年から77年にかけて撮影した〈アカバナー〉で、米軍基地のあるコザと金武の繁華街にあったバーで働く女性や、そこに出入りする黒人兵を撮った。石川もまたバーで働いており、被写体との親密さに裏打ちされた独特の距離感をとらえた写真は、その後の石川の写真にも通底する魅力にもなっている。

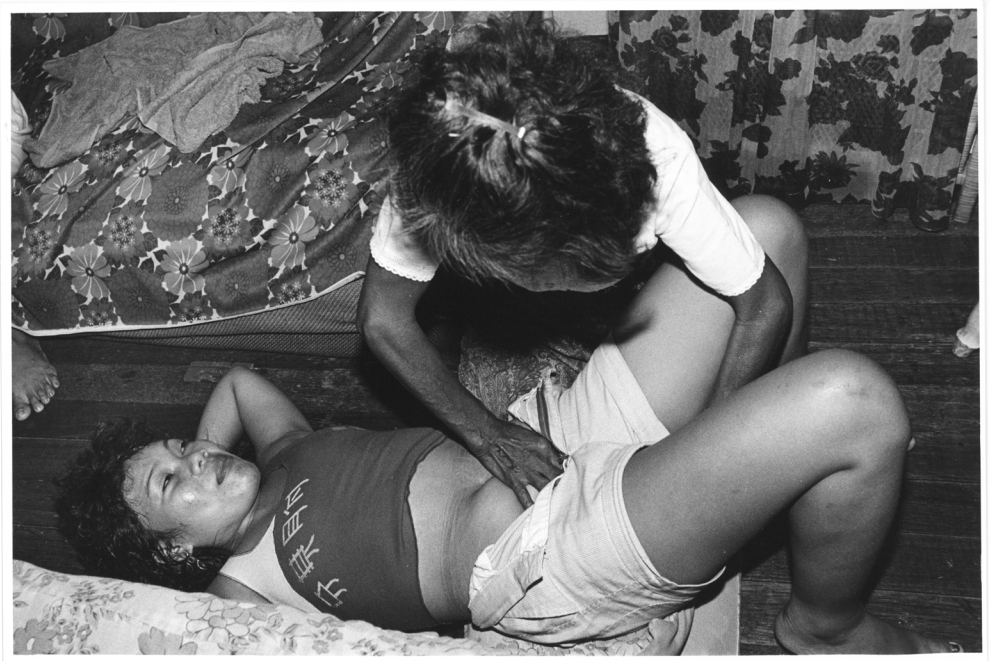
石川は1988年から翌年にかけて、〈フィリピン人ダンサー〉シリーズを撮影した。石川が〈アカバナー〉を撮り終えてから11年ぶりに金武を訪れたところ、元の店で働いていた女性は沖縄人ではなく、フィリピンから出稼ぎ労働者としてやってきたダンサーに入れ替わっていたという。彼女たちには、私もここで働いていたということを伝え、実際にダンサーたちが働く場面だけではなく、オフの場面の撮影も行なっている。寝室やお店でリラックスした様子をとらえた表情からは、石川が彼女たちとも親密な関係を結んだことが窺える。そして、ビザの切り替えのために一時的に帰国することになったふたりのダンサーに同行し、石川はフィリピンに向かうことになる。

2021年の今年、沖縄県立博物館・美術館で石川真生の47年にも及ぶ経歴を、15のシリーズとともに紹介することができた。これらのシリーズを振り返ると、石川は沖縄にとどまらず、日本や海外でも撮影していることがわかる。一貫しているのは、沖縄と沖縄に関連する人物を撮るということだが、米軍基地をどのようにとらえるべきなのか、という発想から、アメリカ本土で暮らす退役軍人を訪ねたり、旧日本軍が残した東南アジア各地の戦跡を知る人物にも現地で取材している。〈フィリピン人ダンサー〉は、石川が海外にカメラを向けた最初期のものといえ、その後の展開を考える上でも重要なシリーズである。

石川はアメリカやオーストラリアの美術館にも収蔵されている写真家だが、アジア・オセアニアの島嶼地域にも広く紹介したい重要な作家であると考えている。実際にこの度のトーク&ディスカッションで、フィリピンに住むアーティストや研究者の方とお話しすることで、改めてその思いを強くした。それぞれの島がこれまでに辿ることとなった歴史は、そこに住む人々を葛藤状態に置き、いまなお様々な出来事に人々は揺れ続けている。石川が写真家になる最初のきっかけもまた、復帰に揺れる沖縄の現状を目の当たりにしたことによっている。歴史といえばナショナルヒストリーがひとつのモジュールになっているが、こうしてそれぞれの島が持つ歴史を共有し、それぞれの立場から複数重ね合わせてみることで、新たな発想の源泉が見つかるのかもしれない。ネーションとは別の単位で物事をとらえるアイディアは、すでにあちこちで萌芽しているように思う。そのことを再認識した機会であった。

亀海 史明（那覇）
沖縄県立博物館・美術館学芸員。石川真生の初期作品から最新作までの全15シリーズを紹介した展覧会 「石川真生展：醜くも美しい人の一生、私は人間が好きだ。」を企画・担当。





〈フィリピン人ダンサー〉より、フィリピン（オロンガポ）。（1988-89）© Mao Ishikawa



〈フィリピン人ダンサー〉より、フィリピン（オロンガポ）。（1988-89）© Mao Ishikawa



〈フィリピン人ダンサー〉より、金武町（新開地）。（1988-89）© Mao Ishikawa



〈フィリピン人ダンサー〉より、金武町（新開地）。（1988-89）© Mao Ishikawa



アトリエ銘苅ベース外観

JEJAK-旅 TABI EXCHANGE に参加して

当山彰一

大変期待できる内容のプログラム参加オファーを2020年上旬にいただいた。内容は、アジアの演劇関係者が集い、アジア圏の交流と演劇発信を今後どう行えるのかを考えるシンポジウムや、ワークショップ、演劇の上演。 そのような壮大なプログラムの会場に2017年にオープンした当劇場 “アトリエ銘苅ベース”を選んでいただいた、とてもワクワクしました。 さらに、演劇上演に「9人の迷える沖縄人～50 years since then～」も選んでいただいた、 期待に胸が膨らみました。



しかしコロナウイルス禍となり、全てのプログラムが再考されたのは残念なことでした。が、事務局の皆さんの尽力でオンラインによるプログラムが実施でき嬉しいかぎりです。

「9人の～」はオンライン上演、その後シンガポールの方から貴重な感想をいただき国が違っても内容が伝わっていて、意図したメッセージを伝えられたこがよくわかりました。

ジョグジャカルタの方と、若葉町ウォーフの佐藤さんとの対談では、それぞれの地域でどのように作品が創作され、対象を意識して作品を作っているのか、など具体的な話ができました。

琉球舞踊をレクチャーする回では、琉球舞踊手の動きを画面いっぱいのアジアの方々が沖縄の舞踊家と一緒に動かしている光景は感動しました。メイクのレクチャーは急遽、女性のメイクから半分男性のメイクに変えるという、現場ではまずないレクチャーもとても面白く、貴重な経験ができました。

今後も、アジアの中心地「沖縄」としてこの関係を継続しまだ出会っていないアジアの皆さんと交流ができたらと思っています。

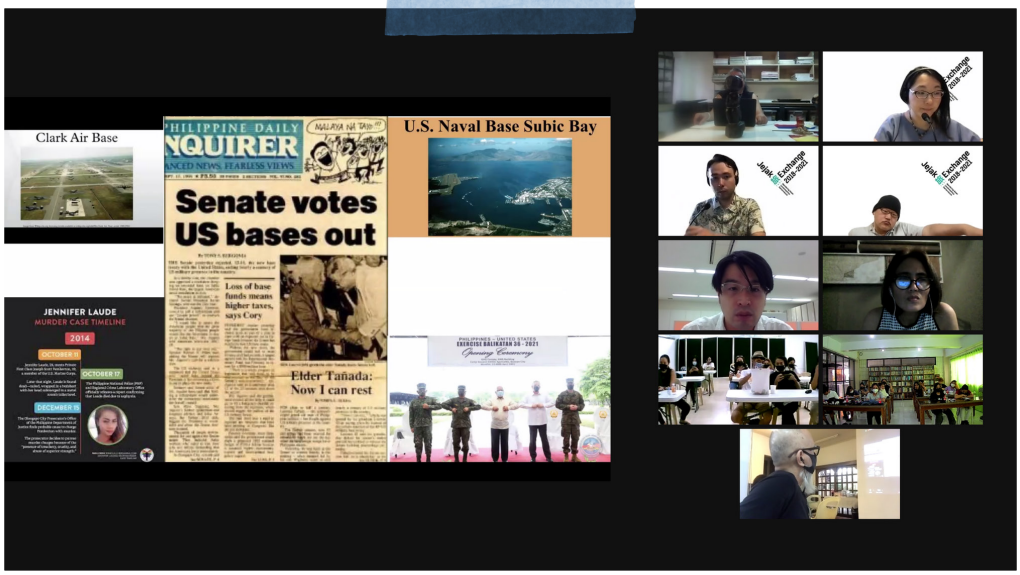


当山 彰一（那覇）
俳優。「アトリエ銘苅ベース」代表。








Clark Air Base
PHILIPPINE DAILY INQUIRER
Senate votes US bases out
Loss of base funds means higher taxes, says Cory
Elder Tañada: Now I can rest
U.S. Naval Base Subic Bay
JENNIFER LAUDE
MURDER CASE TIMELINE
2014
OCTOBER 11
OCTOBER 17
DECEMBER 18
Joint Exchange 2020-2021


GREEN PAPAYA ART PROJECTS





2018
YOGYAKARTA
INDONESIA

13 July 2018 | 7:00–9:00 pm
at Cemeti - Institute of the Arts and Society
Jejak-旅 Tabi Exchange Opening Night

13–17 July 2018 | 10:00 am–5:00 pm
***[Archive-based Exhibition]* Choreographic Traces: Body, History and Lines of Investigation**

at Ace House
Pichet Klunchun - Translating Theppanom: (Re)Creating the Contemporary from the Classical

at Ruang MES 56
Padmini Chettur - The Rigorous Practice of Freedom

13 July–11 August 2018 | 10:00 am–5:00 pm
at Cemeti - Institute for the Arts and Society
***[Archive-based Exhibition]* Choreographic Traces: Body, History and Lines of Investigation**

Peeping the Archive: Drunk Anything American Vis-a-vis National Identity: The Archive of Bagong Kussudiardja & Wisnu Wardhana in the 1950s-1960s

14 July 2018 | 7:30 pm
at Kedai Kebun Forum
***[Main Performances]* Pichet Klunchun - I Am Demon**

15 July 2018 | 7:30 pm
at Langgeng Art Foundation
***[Main Performances]* Padmini Chettur - Beautiful Thing 2**

16 July 2018 | 10:00 am–5:00 pm
at Concert Hall, Pascasarjana ISI Yogyakarta
Master Class Pichet Klunchun

16 July 2018 | 7:30–9:30 pm
at Langgeng Art Foundation
***[Panel Discussion]* Between Theory and Practice: Getting to Contemporary**

Speakers:
Padmini Chettur (Chennai)
Pichet Klunchun (Bangkok)
Yudi Ahmad Tajudin (Yogyakarta)
Donna Miranda (Manila)

Moderator:
Lim How Ngean (Kuala Lumpur)

17 July 2018 | 10:00 am–5:00 pm
at Concert Hall, Pascasarjana ISI Yogyakarta
Master Class Padmini Chettur

17 July 2018 | 7:30–9:30 pm
at Langgeng Art Foundation
***[Panel Discussion]* Creating Works, Carving a Path: Strategies and Tactics**

Speakers:
Thanapol Virulhakul (Bangkok)
Sekar Putri Handayani (Surakarta)
Satoko Ichihara (Tokyo)

Moderator:
Joned Suryatmoko (Yogyakarta)

17–18 July 2018 | 10:00 am–6:00 pm
at Artist's Studio
***[Open Studio]* LA DANSE MACABRE (Process in Progress)**

by **Gusbang Sada (Bali-Yogyakarta)**
and **Natasha Tontey (Jakarta-Yogyakarta)**

18 July 2018 | 7:00–9:30 pm
at Cemeti - Institute for the Arts and Society
***[Performance Lecture]* Histories of The Personal, National and Communal: Home and Abroad**

by **Mark Teh (Kuala Lumpur)**
and **Yudai Kamisato (Tokyo-Kawasaki)**

19 July 2018 | 7:00–10:30 pm
at Cemeti - Institute for the Arts and Society
[Performances]

TubuhDANGTubuhDUT
(Research in Progress)
by **Ayu Permata Sari (Lampung-Yogyakarta)**

Samar-samar Karya Kolaboratif
(Work in Progress)
by **Fasyali Fadzly (Kuala Lumpur)**
and **Iefiz Alaudin (Kuala Lumpur)**

Image of the Giant
by **Yennu Ariendra (Yogyakarta)**

2018
KUALA LUMPUR
MALAYSIA

20 September 2018 | 8:00 pm
at Black Box, Akademi Seni Budaya dan Warisan Kebangsaan (ASWARA)
[Lecture Performances/Work-in-Progress Presentation (followed by post-show Q&A)]

Floating Bottle Project
by **Natsuko Tezuka (Toshima/Fukuoka & Berlin)**
Venuri Perera (Colombo)
Yeong Ran Suh (Seoul/Copenhagen)

Maharajawana
by **Teuku Umar Ilany (Kuala Lumpur)**

21 September 2018 | 8:00 pm
at Studio Petalawati, Akademi Seni Budaya dan Warisan Kebangsaan (ASWARA)
[Lecture Presentations] **Methods and Histories of the Personal to National**

by **Linda Agnesia Mayasari (Yogyakarta)**
and **Mark Teh (Kuala Lumpur)**

22 September 2018 | 3:00 pm
at Studio Petalawati, Akademi Seni Budaya dan Warisan Kebangsaan (ASWARA)
[Panel Presentation] **On Curating/Programming Festivals**

22 September 2018 | 8:30 pm
at Black Box, Akademi Seni Budaya dan Warisan Kebangsaan (ASWARA)
[Panel Presentation] **Indonesian/Malaysian Play-Reading Showcase**

23 September 2018 | 10:30 am
at Studio Petalawati, Akademi Seni Budaya dan Warisan Kebangsaan (ASWARA)
[Roundtable Discussions] **Tangent Practices of Articulating the Artistic**

23 September 2018 | 3:00 pm
at Black Box, Akademi Seni Budaya dan Warisan Kebangsaan (ASWARA)
[Works-in-Progress Showcase (followed by post-show Q&A)]

LA DANSE MACABRE
by **Natasha G. Tontey (Yogyakarta)**
and **Gusbang Sada (Denpasar, Bali)**

TubuhDANGTubuhDUT
by **Ayu Permata Sari (Yogyakarta)**

Merespon Trauma
by **Naque Ariffin (Kuala Lumpur)**

25 September 2018 | 6:30–10:30 pm
at DPAC Black Box
Masterclass
by **Pichet Klunchun (Bangkok)**

26 September 2018 | 6:30–10:30 pm
at DPAC Black Box
Masterclass
by **Padmini Chettur (Chennai)**

28–29 September 2018 | 8:00 pm
at DPAC Theatre
DOUBLE BILL:
Pichet Klunchun's "I Am Demon"
& **Padmini Chettur's "Varnam-edit"**

30 September 2018 | 11:00 am–12:00 pm
at DPAC Black Box
In Conversation with Pichet Klunchun

30 September 2018 | 1:30–3:00 pm
at DPAC Black Box
In Conversation with Padmini Chettur

2020
ROXAS CITY
PHILIPPINES

22 January 2020 | 9:30–11:30 am
at Roxas City Heritage Sites
Tour of Roxas City Heritage Sites

22 January 2020 | 12:00–2:00 pm
at Palina River Cruise
Palina River Cruise and Lunch

22 January 2020 | 6:30–7:00 pm
at GRF Auditorium
***[Film Screening]* Mud Man**
by **Chikako Yamashiro**

22 January 2020 | 7:00–7:30 pm
at GRF Auditorium
***[Film Screening]* Pagkatapos ng Tigkiriwi**
by **Danielle Madri**

23 January 2020 | 10:00 am–12:00 pm
at AVR, Collegio de la Purisima Concepcion,
Arnaldo Boulevard Campus
***[Symposium/Theatre]* Politics and Civil Movement in the Philippines: Theatre with a Cause**

Speakers:
Edwin Quinsayas (Manila)
Karlo Mongaya (Manila)
Ariane Carandang (Manila)

Reactor:
Rudy Reveche

Moderator:
Lisa Ito

23 January 2020 | 10:00 am–12:00 pm
at AVR, Collegio de la Purisima Concepcion,
Arnaldo Boulevard Campus
***[Symposium/Theatre]* Politics and Civil Movement in the Philippines: Theatre with a Cause**

Speakers:
Edwin Quinsayas (Manila)
Karlo Mongaya (Manila)
Ariane Carandang (Manila)

Reactor:
Rudy Reveche

Moderator:
Lisa Ito

23 January 2020 | 1:30 am–3:30 pm
at AVR, Collegio de la Purisima Concepcion,
Arnaldo Boulevard Campus
***[Symposium / Theatre]* Politics and Civil Movement in the Philippines: Unfolding Histories: Theatre and Politics**

Speakers:
Alejandro Deoma (Bacolod)
Ma. Cecilia Locsin-Nava (Bacolod)

Reactor:
Ma. Rosalie Zerrudo

Moderator:
Marika Constantino

23 January 2020 | 7:00 pm
at Water District, Punta Tabuk
Dinner hosted by Green Papaya Projects

24 January 2020 | 10:00 am–12:00 pm
at AVR, Collegio de la Purisima Concepcion,
Arnaldo Boulevard Campus
***[Symposium/Theatre]* Movement in Southeast Asia and Japan: Historical Review of PETA Influence in South-East Asia**

Speakers:
Muhammad Abe (Yogyakarta)
Alfian Sa'at (Singapore)

Moderator:
Helly Minarti

24 January 2020 | 1:30–3:30 pm
at AVR, Collegio de la Purisima Concepcion,
Arnaldo Boulevard Campus
***[Symposium/Theatre]* Movement in Southeast Asia and Japan: Performing Community and Formulating Arts Practices**

Speakers:
Janet Pillai (Kuala Lumpur)
Wichaya Artama (Bangkok)

Moderator:
Amy Lien

24 January 2020 | 3:30–4:00 pm
at AVR, Collegio de la Purisima Concepcion,
Arnaldo Boulevard Campus
Introducing Okinawa

Speakers:
Yudai Kamisato (Tokyo)
Sei Kamida (Naha)
Nomura Masashi (Nagano)

24 January 2020 | 6:30–8:00 pm
at GRF Auditorium
***[Performance]* Sa Digma ng Halimaw (Monster's War)** by **SIKAD**

25 January 2020 | 10:00 am–12:00 pm
at GRF Training Centre
***[Workshop]* Morfosis: Understanding the Theatre Basics**

Facilitator:
MJ Apatan (Escalante)

25 January 2020 | 2:00–3:30 pm
at GRF Conference Room
Jejak-旅 Tabi Exchange 2020 Curators/Producers Meeting

25 January 2020 | 7:30–11:30 pm
at Espacio Verde, Dayao
Cocktails and Dinner

2020
BRIDGING EDITION
ROXAS CITY to NAHA + Pandemic

1 December 2020 | 7:00 pm
at Drifters International YouTube Channel
(Available on 1–7 December 2020)
[Video Distribution 1] **Introduction of Jejak-旅 Tabi Exchange**

Speakers:
Helly Minarti (Yogyakarta)
Akane Nakamura (Tokyo)
Masashi Nomura (Nagano)

1 December 2020 | 8:00 pm

at Drifters International YouTube Channel
(Available on 1–4 December 2020)
[Video Distribution 2] **Okinawan Art Culture Theatre "Nine Stray Okinawans - 50 years since the Online Streaming"**

at Okazaki Art Theatre YouTube Channel
[Video Distribution 3] **Yudai Kamisato 'Khao Khao Club.mp4' from Khao Khao Club Online**

at Drifters International YouTube Channel
(Available on 1–7 December 2020)
[Video Distribution 4] **Screening of Short Films Made Under Lockdown**

Curator:
Lisa Ito (Manila)

Short Film Lists:
- Quarantine Exercise (Your Human Rights), RESBAK (April 2020)
- Counter Terror, CAP
- #SONAgKaisa D.I.Y Mask Contra Veerus, RESBAK
- Sakahan (Field, October 2020), Anonymous

2 December 2020 | 8:00 pm

at Drifters International YouTube Channel
(Available on 1–7 December 2020)
[Video Distribution 5] **Presentation 'Criss-crossing the Terrain: From Okinawa to Chiang Mai and Back'**

Speakers:
Mark Teh (Kuala Lumpur)
Yudai Kamisato (Tokyo)

at Drifters International YouTube Channel
(Available on 1–7 December 2020)
[Video Distribution 7] **Podcast 'Tagsupil (Suppression Session)'**

Speaker:
Donna Miranda (Manila)

2 December 2020 | 8:00 pm
at Jejak-旅 Tabi Exchange YouTube Channel
(Available on 1–7 December 2020)
[Video Distribution 8] **Panel Discussion 'Performing Resilience'**

Speakers:
Alfian Sa'at (Singapore)
Muhammad Abe (Yogyakarta)
Su-Wenchi (Taoyuan)
Sei Kamida (Naha)

Moderator:
Nabilah BM. Said

4 December 2020 | 8:00–9:30 pm
at Drifters International YouTube Channel
[Interaction QnA-2] **After the Empire? Common Ground Between Okinawa and Southeast Asia**

Speakers:
Masashi Nomura (Nagano)
Gakuji Awa (Naha)
Shoichi Touyama (Naha)
Alfian Sa'at (Singapore)

5 December 2020 | 6:00–8:00 pm
at Drifters International YouTube Channel
[Interaction QnA-6] **Emancipatory Movements: A Regroup of Solidarities**

Speakers:
Lisa Ito (Manila)
Arianne Carandang (Manila)
Karlo Mongaya (Manila)
Tina Ponce (Manila)
Chrissy Ustariz (Manila)

6 December 2020 | 6:00–7:30 pm
at Drifters International YouTube Channel
[Interaction QnA-8] **Performing Resilience**

Speakers:
Alfian Sa'at (Singapore)
Muhammad Abe (Yogyakarta)
Su-Wenchi (Taoyuan)
Sei Kamida (Naha)

Moderator:
Nabilah BM. Said

7 December 2020 | 7:30–9:00 pm
at Drifters International YouTube Channel
[Interactive QnA-5] **Criss-crossing the Terrain: From Okinawa to Chiang Mai and Back**

Speakers:
Mark Teh (Kuala Lumpur)
Yudai Kamisato (Tokyo)

2021
NAHA, OKINAWA JAPAN (ONLINE)

13 July 2021
12:00–1:30 pm (MST) | 1:00–2:30 pm (JST)
at Online
***[Lecture]* Getting to Know Okinawa Through Dancing - Ryukyu Traditional Dance & Kumiodori**

Speakers and Facilitators:
Osamu Aka (Naha)
Michihiko Kakazu (Naha)
Takumi Tamaki (Naha)
Itsuo Nakamura (Naha)

14 July 2021
4:00–6:00 pm (MST) | 6:00–8:00 pm (JST)
at Zoom Webinar/Komunitas Sakatoya
***[Symposium]* First Encounter: Connecting Japanese Theater Network and Yogyakarta Theatre Community**

Speakers:
Ibed Surgana Yuda (Bali)
Shoichi Touyama (Naha)

Moderators:
Masashi Nomura (Nagano)
Muhammad Abe (Yogyakarta)

Discussants:
Makoto Sato (Yokohama)
Agnes Christina (Yogyakarta)

16 July 2021
5:00–6:30 pm (MST) | 6:00–7:30 pm (JST)
at Akademi Seni Budaya dan Warisan Kebangsaan (ASWARA)
***[Workshop]* Getting to Know Okinawa Through Dancing - Ryukyu Traditional Dance & Kumiodori**

Speakers and Facilitators:
Osamu Aka (Naha)
Michihiko Kakazu (Naha)
Takumi Tamaki (Naha)
Itsuo Nakamura (Naha)

17 July 2021
10:00–12:00 pm (PHT) | 11:00–13:00 pm (JST)
at Zoom Webinar/Ang Panublion Museum, Green Papaya Art Projects
***[Curators' Talk & Discussion]* Resonance Across Islands in Asia: Okinawan Action and Art**

Chikako Yamashiro: Boundless Imagination

Speaker:
Keiko Okamura (Tokyo)

Moderator:
Eileen Legaspi-Ramirez (Manila)

Discussant:
Vim Nadera (Manila)

17 July 2021
13:00–15:00 pm (PHT) | 14:00–16:00 pm (JST)
at Zoom Webinar/Ang Panublion Museum, Green Papaya Art Projects
***[Curators' Talk & Discussion]* Resonance Across Islands in Asia: Okinawan Action and Art**

Mao Ishikawa: Human Empathy and Its Questions

Speaker:
Fumiaki Kamegai (Naha)

Moderator:
Eileen Legaspi-Ramirez (Manila)

Discussant:
Vim Nadera (Manila)

キュレーター

ヘリー・ミナルティ

インドネシア ・ ジャカルタ生まれ。インディペンデントのダンス研究者／キュレーターとして活動。理論と実践をつなぐラディカルな戦略を探求する。言説活動としての振付の史学史および人間の身体／性質の理解をもたらす折衷的知識に特に関心を持つ。アジア、欧州、米国で様々な芸術交流プロジェクト、フォーラムに参加し、研究フェローシップを実施し、ブリティッシュ・チェヴェニング賞、アジアフェローズ奨学金、アジア文化評議会、そして最近ではUS-ASEANフルブライト客員研究員フェローシップを受賞。英国ローハンプトン大学でダンスの博士号を取得し、近年ジョグジャカルタに拠点を移動。振付の概念を拡張するための協働プラットフォーム「LINGKARAN | koreografi」を立ち上げている。

中村茜

1979年東京生まれ。日本大学芸術学部在籍中より舞台芸術に関わる。現代演劇、コンテンポラリーダンスのアーティストやカンパニーの国内外の活動のプロデュース、 サイトスペシフィックなフェスティバルや、領域横断的な人材育成事業などを手掛ける。ST横浜のプログラムディレクター（2004～2008年）を経て、 2006年、株式会社プリコグを立ち上げ、 2008年より同社代表取締役。チェルフィッチュ・岡田利規、ニブロール・矢内原美邦、等の国内外の活動をプロデュース。海外ツアーや国際共同製作のプロデュース実績は30カ国70都市におよぶ。2009年NPO 法人ドリフターズ・インターナショナルを設立。舞台制作者オープンネットワークON-PAM 発起人・理事。2011年より日本大学芸術学部非常勤講師。これまで国際交流基金アジアセンター、ブリティッシュ・カウンシル、KAAT 神奈川芸術劇場、東京都や、大分県・国東市および豊後高田市などとの協働実績を持つ。2019年は、日本財団主催の障害・性・世代・言語・国籍などを超えることを目指す「True Colors Festival – 超ダイバーシティ芸術祭 – 」の運営事務局を担うなど活動の幅を広げている。

リム・ハウニェン

マレーシア出身。インディペンデントのダンスドラマトゥルク、プロデューサー、パフォーマンスメーカーであり、30年以上にわたって舞台芸術に携わる。シンガポール国立大学にて博士号取得。シンガポール、タイ、インドネシア、カンボジアの著名な振付家のドラマトゥルクを担当した。アジアのドラマトゥルクのためのプラットフォームであるアジアン・ドラマトゥルク・ネットワーク（ADN、2016年）の創設者でもある。2018年のJejak-旅Tabi Exchange クアラルンプール、ジョグジャカルタではキュレーターを務めた。

野村政之

演劇制作者／ドラマトゥルク。1978年生、長野県出身。2007年から劇団青年団・こまばアゴラ劇場制作部に入る。並行して若手演出家の公演にドラマトゥルクなど様々な形で関わる。2014年に沖縄に移住、（公財）沖縄県文化振興会チーフプログラムオフィサーとして、那覇市の小劇場「アトリエ銘苅ベース」の開設を支援し、その後民間小劇場運営者による「全国小劇場ネットワーク会議」を立ち上げる。2018年10月に長野に拠点を移し、現在、長野県県民文化部文化政策課文化振興コーディネーター、舞台芸術制作者オープンネットワーク（ON-PAM）理事、全国小劇場ネットワーク代表。ドラマトゥルクとしての近作に市原佐都子／Q『バッコスの信女ーホルスタインの雌』（あいちトリエンナーレ2019）、山城知佳子『あなたをくぐり抜けて』（KYOTO EXPERIMENT 2018）、神里雄大／岡崎藝術座『バルパライソの長い坂をくだる話』（KYOTO EXPERIMENT 2017）などがある。

主催：

一般社団法人ドリフターズ・インターナショナル

助成：

国際交流基金アジアセンター アジア・文化創造協働助成

CORE TEAM:

発行：

中村茜

黄木多美子、佐藤瞳、瀬藤朋 (precog)

野崎美樹

編集：

ヘリー・ミナルティ

編集アシスタント：

エチャ・ワヒュニ、ディナ・トリアストゥティ

デザイン：

ダマー・ソソドロ

翻訳：

山田カイル (Art Translators Collective)

角田美知代

クレジットのない写真は、各開催都市のドキュメンテーションチームによる撮影です。

プログラム詳細についてはJejak-旅 Tabi Exchange 公式ウェブサイト (https://jejak-tabi.org) もしくはQRコードをご覧ください。


DRIFTERS
INTERNATIONAL


ASIA
center
JAPANFOUNDATION


Jejak
旅
tabi
Exchange
2018–2021
Wandering Asian
Contemporary
Performance


Jejak Exchange
旅
tabi
2018–
2021
Wandering Asian
Contemporary
Performance


Jejak
旅
tabi
Exchange 2018–
2021
Wandering Asian
Contemporary
Performance


Jejak
旅
tabi
Exchange
2018–2021
Wandering Asian
Contemporary
Performance


Jejak
旅
tabi
Exchange
2018–
2021
Wandering Asian
Contemporary
Performance

Jejak 旅 tabi Exchange 2018–2021
Wandering Asian Contemporary Performance

Jejak 旅 tabi Exchange 2018–2021
Wandering Asian Contemporary Performance

Jejak 旅 tabi Exchange 2018–2021
Wandering Asian Contemporary Performance

Jejak 旅 tabi Exchange 2018–2021
Wandering Asian Contemporary Performance

Jejak 旅 tabi Exchange 2018–2021
Wandering Asian Contemporary Performance

Jejak 旅 Exchange 2018–2021

Wandering Asian Contemporary Performance